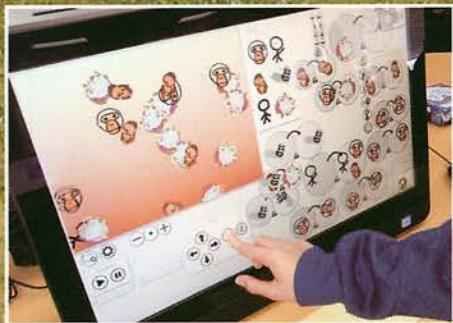
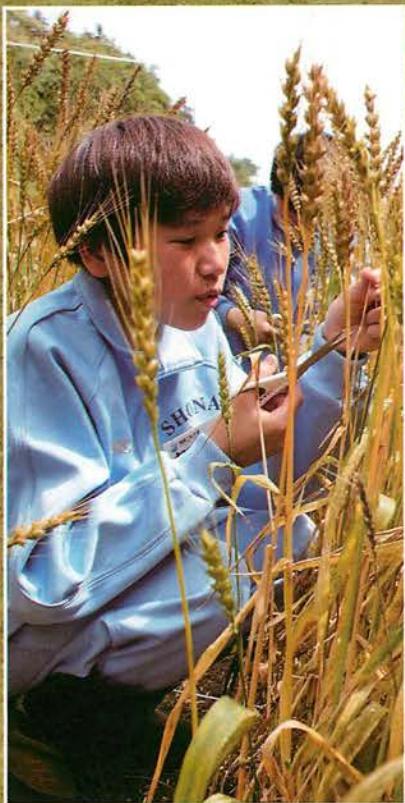


# 社会に一步踏み出し 自分の可能性を広げよう

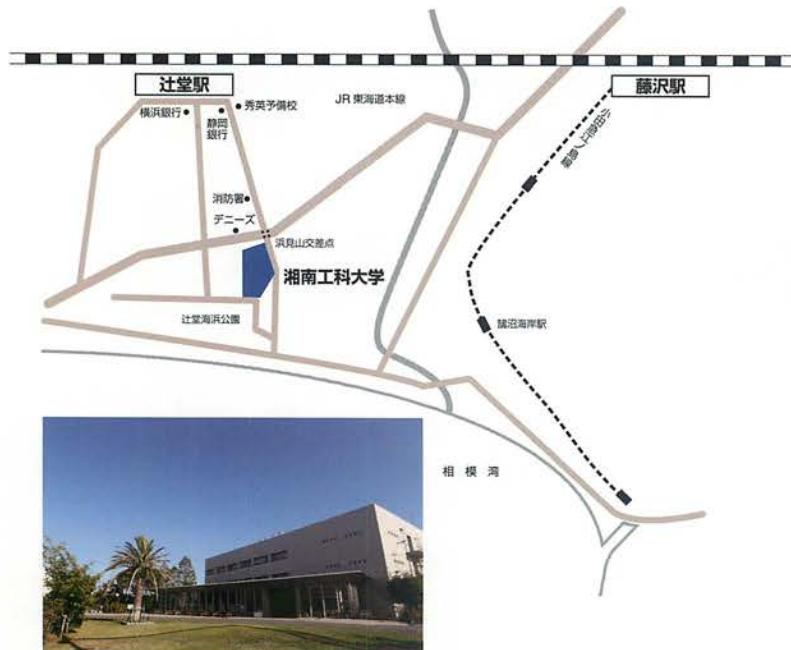
共通教養科目 「社会貢献活動」報告書  2013(平成25)年



All  
Technologies  
are for Happiness  
of People

湘南工科大学

全ての工学は人々の幸せのために



**湘南工科大学**  
SHONAN INSTITUTE OF TECHNOLOGY

**湘南工科大学社会貢献活動支援室**  
〒251-8511  
神奈川県藤沢市辻堂西海岸1-1-25  
TEL: 0466-30-0231 (直通)  
E-mail: shakou@center.shonan-it.ac.jp

I issued date: 2013.May.10  
Publisher: Shonan Institute of Technology  
Producer: designFF Co., Ltd.  
Art director: I. Fukuzawa  
Editorial designer: M. Takada  
Writer: E. Shimamura  
Photographer: Shonan Institute of Technology,  
H.Azuma, S.Arai,  
Printing: Jomo Printing Co., Ltd.

- 1 ● 社会に一步踏み出し、自分の可能性を広げよう
- 4 ● 福祉ものづくり
- 8 ● 茅ヶ崎里山保全
- 10 ● 辻堂のヤング☆スクエア
- 12 ● ピスケットワークショップ
- 14 ● 実習テーマ紹介
- 19 ● 社会貢献活動2  
自ら考え行動する市民社会の担い手を育成！
- 22 ● 「社会貢献活動」で学んだこと
- 24 ● 学生たちのまだ見せていない一面に、  
光を当てるきっかけに
- 26 ● 実習テーマおよび実習受入先(2013年度)
- 27 ● これまでの外部評価委員会の  
議論をふりかえって
- 30 ● 鳥の目で「ふりかえる」実習体験
- 34 ● 必要なのは、物事に対する好奇心と探求心
- 35 ● 外部評価委員会報告
- 36 ● 社会貢献活動支援室とは

# 社会に一步踏み出し

## 自分の可能性を広げよう

「社会貢献活動」ってなんだ?

「社会貢献活動」とは、学外の市民団体や施設などで50時間以上の実習を行いうと2単位取得できる授業科目です。「社会貢献活動1」と、「社会貢献活動2」があります。

「社会貢献活動1」は実習先で用意されている活動を選ぶ選択型、「社会貢献活動2」は「社会貢献活動1」で実習を終えた学生がさらに進むプログラムで、実習先に活動内容を提案していく提案型です。

履修登録→事前研修→中間期研修→終了報告を行い単位が認定されます。

活動する実習テーマはおよそ35あり、実習生が自由に選択することができます。活動分野のキーワードとして「教育」、「福祉」、「自然・環境」「社会」「工学的取り組み」「情報」「ユニバーサルスポーツ」があります。

一つ一つの実習テーマについては、この報告書に詳しく紹介されていますのでお読み下さい。

「社会貢献活動」では、以下の4つの教育目標を掲げています。

それぞれの頭文字をつなげて“SMILE(スマイル)”と呼んでいます。

(1)持続可能な社会を実現である:Sustainability

(2)工学の知を一般市民・次世代・社会に伝える:Mission

(3)市民生活の要求を受け取り、利用者の目線でチームの持っている力を活用・運用である:Interpreter

(4)学びと人間性豊かな工学技術者:Learning & Engineer

サービスラーニングとしての「社会貢献活動」

わかりやすく言えば、学生が大学の授業で学んだ知識を生かし、自分がもつている経験を引き出しながら、学外でマンパワーを必要としている市

民団体や施設などで、社会をよりよくしたいと何かに取り組んだり、生活上困っている方々といつしょになつて様々な活動を行つたりすることで、学生が実践的な技術を習得するとともに、人間的にも生長していく、というプログラムです。

また、この科目で一番大切なことは、学生が社会に貢献する活動を通して、自分の可能性を知り、学ぶことの意義を体で感じることです。授業科目として単位認定することは、それが学生の「学び」に繋がるからなのです。

「社会貢献活動」の実習を通して、気がつかなかつた力を発見したり、さらに力を伸ばすためにどのような勉強をする必要があるかを考えたり、体験を通してしか得られない学びを大学での学びに繋げてほしいのです。そのため、実習するだけでなく、それを振り返りさらに発展させるための研修会をワークショップ形式で行っています。このような、実習体験と学びとを連結させる教育方法は、サービスラーニングと呼ばれ、アメリカではじまりました。日本でも普及が期待されており、工学部でこのサービスラーニングを取り組んでいるのは、本学だけです。

### 「社会貢献活動」の歩み

「社会貢献活動」は、2002年度に各学科の専門科目として開講され、当初は、約20種類の実習テーマの中から60時間実習する科目でしたが、事前研修会、中間期研修会、報告会などを充実させ、反対に実習時間は50時間に減らしました。そして、2006年度のカリキュラムから、共通教養科目になり、「社会貢献活動1」を終えた学生がさらに進む科目「社会貢献活動2」が設置されました。こうして4単位まで単位認定できるようになり、2008年度に開講されて初めて学生が「社会貢献活動2」を履修しました。

さらに、2005年度からは、地域の有識者の協力を得て、社会貢献活動支援室もスタートし、市民と一体となつた実習が実現しました。2010年度から、「社会貢献活動1」は、インターネット・ソーシャル・プロジェクト実習を加えた3つの科目の中から選ぶ、選択必修科目になり、2011年度の2年生から選択必修が適用されています。

なお、この科目の運営には、各学科や総合文化教育センターの教員、社会貢献活動支援室の教育スタッフ、教務課の事務職員からなる「社会貢献活動連絡協議会」があたります。



全ての工学は人々の幸せのために

## 学生にとっての「社会貢献活動」

「社会貢献活動」を学生が受講する動機は様々ですが、教育効果について調査したところ、大学の外での人々との新たな出会いやふれあいを求めて選択した場合が多いようです。さらに、「社会貢献活動」に対するアンケート結果では、活動についての満足度が相当高く、活動そのものを好きになつて友人にも勧めたい、自分の将来に役立つだろう、という意見が多数を占めています。

また、中間期研修ワークショップでの「ふりかえり」では、「社会貢献活動」に参加することで、自分の可能性が広がつたという認識の深まりを見ることもできました。

- 社会貢献活動1、履修登録から実習終了までの流れ**
- 1.授業ガイダンス** 4月上旬・10月下旬
  - 履修説明  
相談受付
    - 支援室にて「社会貢献活動1」のポイントを説明し、実習テーマを紹介します
    - 社会貢献活動専用Web上から履修登録を始める
- 2.履修&実習テーマ登録** 4月中旬・10月中旬
  - 最初の履修登録は学内のPCから社会貢献活動専用Web上から行う
- 3.事前研修会** 4月中旬・10月中旬
  - 実習テーマ登録  
相談受付
    - 社会貢献活動とは？ 実習テーマ紹介など
    - 社会貢献活動専用WEB上で履修登録を終える
- 4.実習テーマ別ガイダンス** 4月下旬～・10月下旬～
  - 実習テーマ登録  
相談受付
    - スケジュールに従って、希望するテーマ別ガイダンスに参加
    - 実習先の詳細・受入れ条件・注意事項等の説明
    - 志望動機の確認 → 実習テーマの確定または変更
- 5.実習先初回訪問日連絡** 5月中旬・11月上旬
  - 支援室で実習先と初回訪問日を調整します
  - 支援室より実習テーマ別に、初回実習日をメールで連絡
- 6.実習開始** 5月中旬・11月上旬
  - 初回訪問時、実習先でのオリエンテーション
  - 2回目以降、実習先との連絡は実習生が各自で行う
  - 実習時間は「活動記録カード」に記入し、Webにも積算時間に入力する
- 7.中間期研修ワークショップ** 6月下旬・8月上旬・11月下旬・2月上旬
  - 実習を15時間以上行った実習生を対象に実施します
  - 実習前半をふりかえり、実習後半の目標を立てましょう！
  - 中間期研修会終了後、「中間期レポート」をWebに記入
- 8.実習終了** 〈50時間以上〉
  - 実習終了の見込みが立ったら、実習先と活動時間数を確認
  - Webに活動時間を入力し、「報告書」を記入
  - 「報告書」をプリントして、実習最終日までに実習先に持参
  - 同時に実習先に「評価書」の記入をお願いする
  - 実習終了時アンケートなどの記入
- 9.報告会** 前期・後期とも定期試験の翌日(8月上旬・2月上旬)
  - 実習の報告をパワーポイントにまとめ、発表する

本報告書では、実習科目の「社会貢献活動」は括弧をつけて表記し、一般的な社会貢献活動と区別しています。

以上、「社会貢献活動」とは、何かについて、簡単に説明しました。「社会貢献活動」は学生が大学の外に出て活動をします。そして、学生は地域に受け入れてもらつて自分をみつめ、新たな自分像や自らの可能性を発見しながら、逆に地域の人々も学生を育ててくれるという、相互的な教育プログラムといえましょう。

大学と実習先(市民団体やNPO、公益財團法人、福祉施設、等)、そして地域の市民の方々がいっしょになつて、実習科目「社会貢献活動」を支えて下さっている、そんな貴重な学びなのです。

今後とも、この実習を皆様に育てていただきたく、よろしくお願ひ申し上げます。

社会貢献活動連絡協議会・社会貢献活動支援室





全ての工学は人々の幸せのために

# 必要なものは一人ひとり違う。 使う人と作る人が一緒に考えるもの創り

■実習分野  
工科系ものづくり

■実習テーマ  
福祉ものづくり

■実施場所  
湘南工科大学

「福祉ものづくり」は、障がいを持った人たちが生活や仕事をするために使う機器を製作する取り組みです。

工学部は、ものづくりを学ぶ学部ですから、まさに大学で勉強したこと、勉強することが実践で活かせる取り組みです。ものを創るとき、何に注意しなければならないでしょうか。それは、使う人の立場に立って、よく考えるということです。「障がいを持った人たち」といっても、一人ひとり別の人です。障がいの程度や部位は違いますし、体の動きも違います。ですから、必要なものは人によって違います。

よく考えてみれば、これは障がいを持つた人に限ったことではありませんね。

人は一人ひとり違っています。誰にでもあてはまることがあります。

現在の世界では、大量生産、大量消費が当たり前になっています。多くの人が同じものを使っています。

たしかにこれは効率的ですが、その影で自分にあったものを手に入れることができず、使うことをあきらめたり、無理して自分を機械に合わせている人がいることも事実です。その顕著な例が障がいを持った人たちでしょう。

「福祉ものづくり」では、本当に必要なものはどんなものなのか、使う人と作る人が一緒に考えます。

作っている最中、出来上がってからも相談して、よいものにしていきます。そして、使う本人が納得できるものが完成すれば、作ってもらった人は本当に満足します。そして、作った学生も協力した人たちもうれしくなると思います。

このように、喜びを分かち合うものづくりがものづくりの本来の姿であると私たちは考えています。

「福祉ものづくり」は、学生の皆さんのが授業で学んだことを実践する場、あるいは次に何を勉強するか考える場なのですが、もっと大切なことは、ものづくりの本当の意味を知ることができる場であるということです。

「福祉ものづくり」は、「社会貢献活動」の実習だけでなく、「プロジェクト実習」を履修しても行うことができます。

そして、これらの科目的単位を取得した後、「卒業研究・卒業演習」や本学の「テクノ・ビジネスチャレンジ」や

「ボランティアチャレンジ」という学生の自主活動を援助する制度を利用して「福祉ものづくり」を行っている学生もいます。

(水谷光:総合デザイン学科)





「福祉ものづくり」の発表会の様子(2012年度)

2014年3月6日、生活介護事業所「朋」で、「福祉ものづくり」の発表会が行われました。この発表会は、2007年から毎年1回この時期に朋で行われ、8回目になりました。学生側からこの1年間に製作したものの紹介、朋、径の職員からは、使った感想などが紹介されます。これまで、学生からは、

「途中で投げ出さずに最後までやりきる、あきらめないという事を学びました。」

「いろいろ人の協力によりいいものができると思った」

「グループでのものづくりをする大切さと大変さを学べた。」

「相手の意見を聞きより良いものに発展させていく楽しみなどを学べた」

「とにかく、完成させたいと思った。」

などというものづくりの基本的なことから、



「ものづくりは、使い手のためにつくるのであり、作り手の都合でつくっているのではない。使い手と共にさらにより良いものを作っていくのがものづくりのあるべき姿だ」という考えが持てた。」「ものを作っているとき、『これを使う人はどういう人だったかな』とか『あの人だったらこういう方が使いやすいかな』など、使う人や渡す人に合わせて、作っている最中に改良したりして、完成に遠ざかってもよりよいものを、という考えになった。」

「最新・最先端の技術だけがものづくりに必要なわけではない。ただ『作る』だけでなくニーズを理解して『誰のために』・『何のために』を考えるものづくりが重要。」

「利用者の事を考え、多くの人の意見を聞き、コミュニケーションを図ることでより良いものづくりが行えることを学びました。」

などという、ものづくりに対する態度まで、様々な学びがあったことがわかりました。



法人型地域活動ホーム・サポートセンター「径」



社会福祉法人「訪問の家」「朋」

生活介護事業所「朋」、サポートセンター「径」  
生活介護事業所「朋(とも)」、サポートセンター「径(みち)」は、横浜市栄区にある重度重複障がい者が通所する施設です。本学とこれらの施設を運営する社会福祉法人「訪問の家」は、「訪問の家と湘南工科大学の『工学技術による障がい者支援モノづくり』の推進に関する覚書」を交わし、「福祉ものづくり」を実践する場を提供していただいている。

## 「朋」の活動で利用するために製作した機器



**どら焼きクッキング** つばさグループでは、どら焼きを作り販売しています。このどら焼きの皮を作るために、ホットプレートに生地を流し込むための装置です。スイッチを押すと一定量の生地がホットプレートに流し込まれ、どら焼きの皮を作ることができます。特に、スイッチ(写真まん中下)には検討を重ね、メンバーさんたちが押しやすいチューブを採用しました。(立正大学との協同制作)



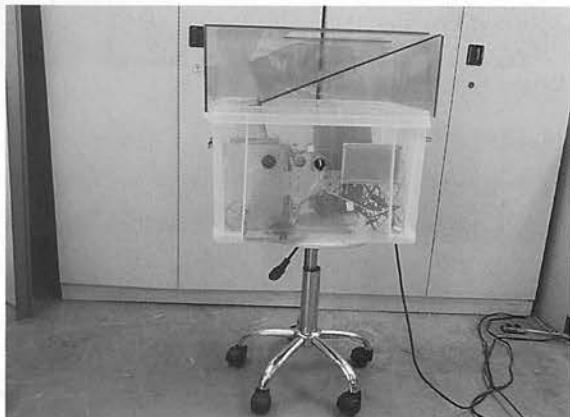
**みのりの楽器** みのりグループでは、バンド活動を通して地域の方々と交流を深めています。バンド活動では、メンバーそれぞれが動かせる部位を使って演奏に参加します。今回制作した「みのりの楽器」は、センサー(写真右)を振ると、スピーカー(写真まん中)から音が出る仕組みです。センサーは、腕に付けたり、ぬいぐるみやクッションなどに入れて使用します。(立正大学との協同制作)



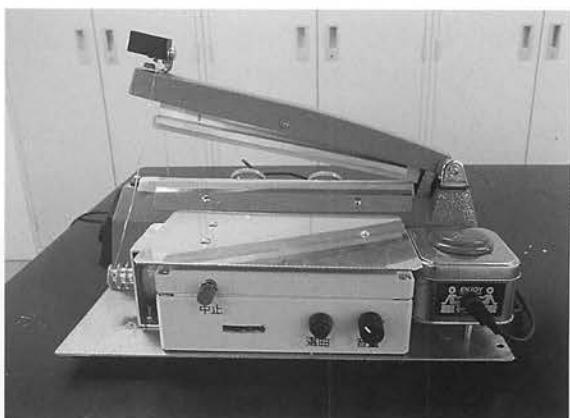
**CANのたいこ** CANのメンバーさんが演奏する太鼓を作りました。ぱちで軽く太鼓に触ると、あらかじめ録音された音が出る仕組みです。録音すればどんな音、声も出力することができます。メンバーのみなさん、楽ししく演奏していました。



**どら焼き焼印装置** つばさグループでは、どら焼きを作り、販売しています。このどら焼きに、つばさグループの屋号「つば茶屋」の焼き印を押す装置を製作しました。これまで、焼き印を押す器具はあったのですが、この「どら焼き焼印装置」を使うと、きれいな焼き印を安全につけることができます。



**小型の缶つぶし機** CANグループでは、アルミ缶のリサイクル活動をしています。回収した空き缶は缶つぶし機でつぶします。今まで使っていた缶つぶし機はとても重く、移動は大きな負担でした。そこで、軽い缶つぶし機を製作しました。缶を潰しているときには音楽がなったり、缶つぶし機の入り口には小さなテーブルをつけて、CANのメンバーが使いやすくなるように工夫しました。



**だいちグループのシーラー** だいちグループでは、クッキーを製造して販売していますが、クッキーの包装するため、ビニール袋のシーリングをする必要があります。これをメンバーのみなさんに行ってもらうために、この「だいちグループのシーラー」を作りました。スイッチ部分は取り外すことができ、離れた場所から操作することができます。

「福祉ものづくり」では、ALS患者船後靖彦氏を

テクニカルアドバイザとして雇用し、

ALS(筋萎縮性側索硬化症)

患者のための生活支援具の

ものづくりも行っています。

船後氏は、

ALSを患ったために、

自分で動かすことができる部位は

眼球とその周りの筋肉だけです。

この船後氏に必要な生活支援具を、

学生と船後氏が相談して製作します。

これまで4年間、船後氏と共に機器を製作してきましたが、

作品を紹介すると、ALS患者だけではなく、

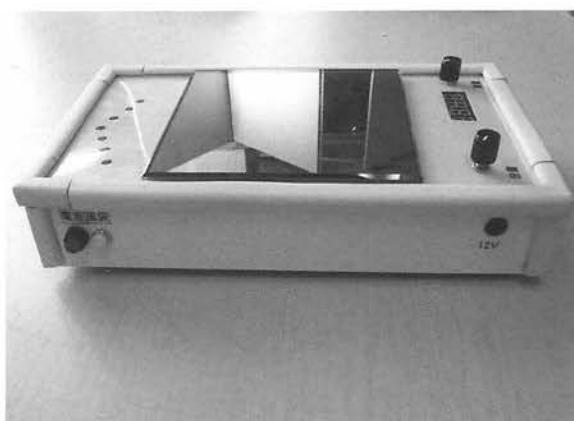
他の方からも同様の要望を受けることも少なくありません。

使用する側と作る側、双方の視点からものづくりをすると、

本当に使い易い機器が設計できるのでしょうか。



## 「サポートセンター径」の活動のために製作した機器



**径のはかり** 径の夢グループでは、「夢のパン屋」で販売するパンを作っています。材料の重さを計測する時にこのはかりを使います。あらかじめセットされた重さに近づいた時、丁度その重さになったとき、超えてしまったときにLEDが光り、音声で知らせてくれます。耳が不自由な人、目が不自由な人でも、材料の計測ができます。

## 今年度、船後氏と協働で制作した機器



**リハビリ用自動土踏まず押し器** 船後氏から、「筋萎縮性側索硬化症患者は、足の筋肉が縮むと、土踏まずに腱が表れます。そして、それを放っておくと親指が内側に折れ曲がり靴がはけなくなります。このため、「リハビリ用自動土踏まず押し器」で、腿を押せば、足の親指折れ曲がり状態はある程度は、回避出来ると考えます。」とのことでした。そこで、ベットの上でも利用できる小型の「リハビリ用自動土踏まず押し器」を開発しました。

## 筋萎縮性側索硬化症(ALS)とは？

ALSとは、運動ニューロン（骨格を動かす筋肉に信号を伝える神経）が障害され、全身の筋肉を動かすことができなくなるという難病です。重度になれば肢体だけでなく、眼瞼など一切の筋肉を動かすことができなくなることもあります。けれども、五感は健常者と同様で、コミュニケーションをとる手段さえ確保できれば、聞き取りを健常者と同様に行うことができます。これら点から、福祉ものづくりにALS患者である船後靖彦氏の協力を仰いでいます。



## ボランティアチャレンジによる「福祉ものづくり」の活動 ALSによる障がいを持った人たちの工学支援

これまで、立正大学、大阪大学、立命館大学などの学生と協働して、和歌山在住のALS患者、和中勝三氏、林静哉氏、大阪在住の久住純司氏のためにマッサージ補助具を製作してきました。ALS患者は、身体を動かすことが難しいこともありますし、筋肉に独特の不快感があります。マッサージ補助具は、それを緩和する装置です。本年度は、さすられる感覚を手掛かりにして、不快感を緩和する装置「さするんです」の開発に取り組みました。3月には大阪大学で久住氏などにプロトタイプ機を試用していただき、アドバイスをいただきました。これらのアドバイスなどを基に、今後も活動を継続し、より良いマッサージ補助具の実用化を目指しています。



全ての工学は人々の幸せのために

# 営みの中にシステムや自然の循環がある。 これこそが生きるためのモデルなんです。

■実習分野  
自然・環境

■実習テーマ  
茅ヶ崎里山保全

■実施団体  
茅ヶ崎里山公園倶楽部

県立茅ヶ崎里山公園は、里山を保全しようと、既存の里山を丸ごと公園にしてしまった場所である。半周すると小一時間かかる園内に、田んぼ、畑、竹林、雑木林、湧水、そして、古民家の休憩所がある。人工的な花壇や植栽は極力少なくし、逆に、園内の生物多様性が大きい点が自慢でもある。実習生はそこで年間を通して、田んぼや畑の作業を行い、里山の生態系保全に従事する。このように書くと、四角四面の活動のようだが、赤ちゃんから80歳まで、約1,000人の会員をもつ茅ヶ崎里山公園倶楽部の市民の皆さんと一緒に楽しく作業をさせていただく。時には、畑の収穫物を味噌汁やお餅としておいしく食す機会もある。ただ、実習生は、目的意識を高く持つように期待されており、単に農作業をするのではなく、常に、工学とのつながりや里山を保全する意義について自問自答するよう促されている。2013年度の実習生、W（情報工学科、2年）は、「茅ヶ崎里山公園の保全活動の初日、自分はここでどうあるべきなんだろうと、とても不安でしたが、50数時間、色々やらせていただいた中で自分に足りないもの、自分にほしいものが見つかりました。誰かのために何かをしてあげたいと考えていた時期が自分にあったのを思い出しました。『ありがとう』と笑顔で言われるのが嬉しくて、将来はそう言われる大人になりたいと思っていた。やはり自分はそうありたいんだな、と再認識出来たのが嬉しかった。」と報告書で書いている。活動の年間スケジュールがあらかじめ決まっているので、活動に参加しやすい実習で、学生に人気があり、また、大いに悩みつつ、変化する自分をたどりやすい実習であるとも言える。実習生の安全を見守り、実習時間を記録し、実習生のつぶやきに長年寄り添ってくださっていた、茅ヶ崎里山公園倶楽部の学生担当・U氏には大変お世話になった。ここに感謝する次第である。（東 宏乃：社会貢献活動支援室）





- 1.雑木林から丸太を切り出し、シイタケのホダ木とする。爽爽とした運搬風景だ。
- 2.田んぼの荒代焼き。生まれて初めて素足で田に入り、慣れない腰つきで土を返す。
- 3.秋に大根畠で、土に密着して作業をする。パソコンばかりの毎日とは違う時間が流れる。
- 4.竹林の竹を柵用にそろえて切る。道具の扱い、作業の安全も大事な学びだ。
- 5.谷戸田で、茅ヶ崎里山公園俱楽部に所属する市民の方々と一緒に、手植えを体験する。
- 6.田の周りは昆虫やカエルの大事な棲家なので、草とりは最低限に抑え、生物多様性を保持する。



全ての工学は人々の幸せのために

# おしゃべりしながら、時間を忘れ遊ぶこと。 手助けも見守りも、どちらも大事。

■実習分野  
一般系・教育

■実習テーマ  
辻堂のヤング☆スクエア

■実施場所  
(公益財団法人)藤沢市みらい創造財団

辻堂のヤング☆スクエアは、辻堂駅前にある辻堂青少年会館の活動である。

辻堂青少年会館は昨年度創立50周年を迎えた。

月1回土曜日の午前中に、会館でクッキーやクリスマスツリーを作ったり、

外に出て、牧場に行ってアイスクリームを食べたり、芋ほりを行ったりしている。夏にはキャンプも行う。

参加者は小学生の子どもたちで、毎月継続的に参加するリピーターの子どもも少なくない。

活動を重ねるうちに、実習生は子どもたちと次第に顔なじみなっていく。

実習生たちは、毎回の活動の準備・後片付け、子どもたちの補助、危険がないように見守ったりなどの活動を行う。

その合間に、子どもたちとおしゃべりをしたり遊んだりしている。後片付けより子どもと関わるのを優先するタイプ、後片付けも一生懸命やるタイプ、実習生によってさまざまである。

時には、「社会貢献活動2」で、実習生が企画した活動を行うこともあり、

これまで、バスボム(入浴剤)づくりや、ペットボトル潜水艦の工作などを行った。

子どもたちの活動をどこまで手伝うかが重要な点で、「どのような手助けをするか、どこまで子どもを見守るか、その境目が少しづかるようになった」(人間環境学科、2年)と活動をふりかえっている。

子どもたちは20人前後参加しているが、すぐに実習生に寄ってくる子どももいれば、引っ込み思案な子どももいて、全員と関わっていくことはなかなか難しい。子どもたち全員と関わることを課題としている実習生もいた。

一方で、後片づけなど「子どもと接している以外の時間の大切さ」や「周囲への気配りや親御さんへの配慮」など、子ども以外の部分への気づきを得た実習生(人間環境学科、2年)もいた。

教員を目指している実習生も、中にはいて、「手をうごかしてもらうのが一番わかつてくれた」

(電気電子工学科、2年)と、教える方法への認識を深めている。(I・M:総合文化教育センター)





- 1.クリスマスツリーづくり。ツリーを飾る花をどこに置こうか相談しているのだろうか。
- 2.ツリーにする木の枝を切る作業。子どもの目線に立って危険がないか見守っている。
- 3.アイスクリームづくり。寒剤の温度を見ている。子どもたちも興味津々でのぞき込んでいる。
- 4.寒剤の温度を子どもたちに見せている。温度が下がってびっくりしている。科学的な視点も大事だ。

# お菓子じゃないよ？一緒に描いて動かそう！ 「ぐちゃごちゃアニメ」の完成だ。

■実習分野  
工科系・教育

■実習テーマ  
ビスケットワークショップ

■実施団体  
(特活)デジタルポケット

お菓子を作るの？と間違えてしまう「ビスケットワークショップ」。「ビスケット」はお菓子の「Biscuit」ではなく、「VISCUIT」というNTTコミュニケーション科学基礎研究所の原田康徳博士が開発したヴィジュアルプログラミング言語のことである。ビスケットという親しみやすい名前が示すように、難しいプログラムではない。使うのは自分の指かマウスだけ。絵を描き、どう動かすかを考えるだけでよい。グルグル回そうか、口をパクパクさせようか…アイディアがどんどん湧いてきて気分はワクワク！できあがったアニメーションは、「ぐちゃっと」、「ごちゃっと」した愉快なアニメ！ 参加者はプログラムを意識することなく作品を仕上げることができる。この不思議で面白い「VISCUIT」を使ったワークショップを通じて、情報化社会に生きるすべての人々の情報リテラシーの理解と向上を目指して活動しているのが(特活)デジタルポケットである。(特活)デジタルポケットの「ビスケット塾」では子どもを対象としたワークショップを開催している。ワークショップでは、「難しそう」と不安そうに現れる参加者の心を解きほぐし、参加者同士が自然とコミュニケーションをとれるようになる魔法(ミニゲーム)がかけられる。この魔法にかかった子どもたちは生き生きと作品を作り、次々に「こう動かしたい！」という気持ちをぶつけてくる。その時がこのワークショップの出番である。「どうしたらいいと思う？」と一緒に考えながら、しかし、プログラムの「P」も使わずに、命令を出す考え方を伝えている。「わかった！」と嬉しそうに叫ぶ子どもたちの顔はとても輝いている。参加者全員が大きなキャンバスに絵を描き、「ぐちゃごちゃアニメ」の完成だ。他の人の描いた絵や動きに刺激され、簡単な動きから複雑な動きへと自らの力で進化していく過程には目をみはる。3月末に教職志望であるI(情報工学科、1年)は、小学校中高学年を対象としたワークショップを開催した。17名の小学生に刺激されてI自身にも新たな発見があったようで、「またやりたい！」と意欲をかきたてている。参加者だけでなく、次は自らが！と思わせる不思議な「ビスケット」。「プログラム」と食わず嫌いをせずに、美味しいくて楽しい「ビスケット」をぜひご賞味あれ。(牧紀子：コンピュータ応用学科)

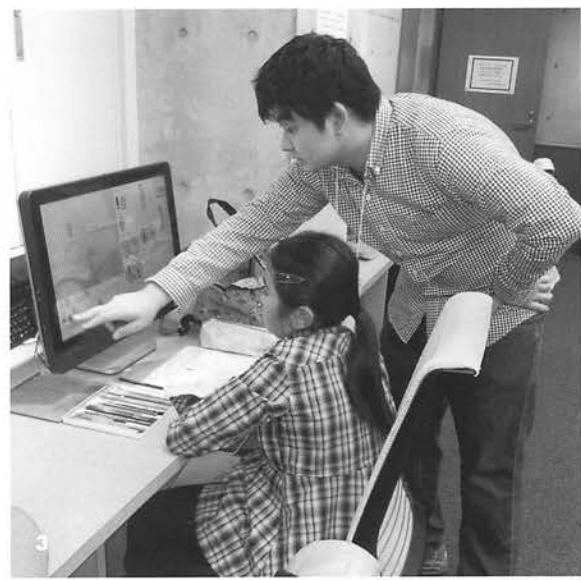




1



2



3

1. 「どうしたらいいかな?」「え~っと...」と身を乗り出して考える子どもたち
2. 「この絵を動かしたらどうなるかな?」
3. 「こういうことをしてみたい!」という子どもと一緒に考える実習生

# 実習テーマ紹介

前項で特集的にとりあげたテーマを含め、2013年度は、32の実習テーマが開設され、その中から、13に及ぶ実習テーマで活動させていただきました。

具体的な活動内容や、実習生の体験学習の様子を中心に報告します。



ある放課後の1日。陽だまりが、子どもたちに優しく微笑むようだ。



小学校の空き教室を利用したキッズクラブ。もちろん校庭も遊び場だ。

## 一般・教育 放課後キッズクラブ

●実施団体  
(公益財団法人)よこはまユース

子どもと一緒に遊びつつ……。実際は  
子どもに遊ばれ自然と笑いが生まれた。

放課後キッズクラブは、横浜市立の小学校の空き教室を活用して、子どもたちの放課後などの居場所である。オセロや積み木などの室内遊びや、ドッジボールをしたりしている。実習生は、子どもと一緒に遊びつつ、子どもたちを見守る。実習生Sは、成長した点として、「ただ一緒に遊ぶだけではなく、子どもたちの安全を考えるようになったこと」を挙げ、実習生Oは、「全体の動きを瞬時に把握できるように常に周りを見渡している」と言つてゐる。毎回顔を合わせていく内にお互いの名前を覚えて、子どもと親しくなっていく。実習生Oは、「なるべく一人一回以上は会話すること」を心がけてきた。そして、「自然と笑顔になれます」と活動をぶりかえつてゐる。(市山)

## 一般・教育　ふりふら勉強会

●実施団体  
（公益財団法人）よこはまユース

### 一緒に活動してくださいました ボランティアに感謝！

この実習は、青少年の居場所である横浜市青少年交流センター（愛称：ふりふらっと野毛山）で開催される、自由参加の勉強会に、学習のサポート役として入る活動である。実習生のSは、初め言葉数も少なく大人しかったが、セントラル長が気軽に声を掛けてくれるうちに、現場に溶け込めるようになつたという。「ふりふら」とある野毛山は、横浜の下町、元気いっぱいの子どもや、反対に課題を抱える閉じた感じの子どもなど、集まつてくる子どもが実際に多様で、Sは、「お子さんによつて距離感が様々で、コミュニケーションを取るのに非常に苦労した」と述べ、最初は戸惑いの方が大きかったようだ。しかし実習は全うした。それは、学習ボランティアの方々の熱心な姿勢や優しい指導方法を知るにつれて、ボランティアについての認識を新たにしたことが良く影響したという。人との出会いに助けられる体験は貴重だ。感謝。（東）



ボーリング大会にて。真剣そのもの。



青少年交流センターは、「自由にふらっと」訪れるこことできる居場所だ。

### 一般・福祉 「ふれあいの一歩」イベント支援

●実施団体 藤沢市肢体不自由児者父母の会

### この人たちとふれあう体験があつて 初めて「人を理解する」意味を学べた

実習テーマ名にある「ふれあいの一歩」とは、父母の会の方々の想いのつまつたネーミングである。活動をともにする方は、知的障がいが無いにもかかわらず、脳性マヒなどがあるために、発語が苦手だったり、移動が自由にならなつたりする。その方たちと同世代にあたる本学の学生が、ボーリングなどのスポーツや買い物、一泊旅行などで「ふれあう」。実習生のOには車椅子生活をする家族があり、段差ではどのように車椅子を押せば良いかわかつていて、その経験知が役に立つたという。彼が実習で設定した目標は「積極的に会話をを行う」で、結果は、「様々なことを会話しながら聞くこと」であった。彼なりの優しさをもつてして、会の皆さんと接したことが伺える。障がい特性には多様性と固有性がある。その幅のある違いを乗り越え、実習を達成した彼の自信が密かに伝わってきて、送り出した側としても安堵した。（東）



みんなで楽しく、郊外型大型ショッピングセンターへお買いものに。



車いすの選手は立派なアスリート。彼らに教わることも多い。



初めて実習先を訪問する実習生

## 一般・福祉 ■ 訪問の家「朋(とも)」活動サポート ● 実施団体 (社会福祉法人)訪問の家

学ぶことがたくさんあったた。『ガンバレ』と言われたのは私たちの方だった

「朋」は、重度の障がいのある方を、地域と家庭で見守り、生活の中で少しでもその人らしさを發揮して欲しいという願いのもとに、横浜市栄区桂台の住宅地の真ん中に作られた通所施設である。通所しているメンバーは重度・重複障がいがあり、言葉によるコミュニケーションができず、横臥したまま生活も余暇活動も行わなくてはならない方がほとんどである。でも、皆さん個性ある方たちで、本学の「社会貢献活動」の「福祉ものづくり」の舞台となっている。今年の実習は、「福祉ものづくり」の実習生3名が、「福祉」の基本を学ぶために、この「朋」での日常生活に見習いとしてお邪魔させていただいた。彼らのつたない報告を読み取れば、「学んだことは、できないことはありません! 頑張れば何でもできます!」の一言に尽き、障がいのある利用者さんたちから、生きる力を授けていただいたのだ、と思う次第である。(東)

## ユーバーサルスポーツ ■ 車いすテニス大会サポート ● 実施団体 神奈川県車いすテニス協会

### 真っ赤に焼ける夏の肌。 辛い分、喜びも大きいはずだ

毎夏、車いすテニスの発祥の地、この神奈川で、全国規模の車いすテニス競技会が開催され、その競技大会運営ボランティアを務めるのがこの実習である。試合が続く4日間、早朝から日没まで駆け抜ける。ボランティア全員が連日参加できないこともあり、通しで参加する本学の実習生は必然的にボランティアリーダーを務める。今年の実習生Oは、淡淡と活動に携わり、大会実行委員会から次のようなお礼状をいただいた。「あなたが活動に対しても真摯に向き合う方法は、立派としか言い様がありません(中略)誰に対しても敬意をもって接するその振る舞いは、あなたの自身にとって、そしてあなたの周りにいるすべての人にとって『宝』です。これからも様々なことを経験していかれると思いますが、どうぞ、自信を持って、自分の思う道を歩んでください。」とある。この言葉で充分報われる実習体験がそこにある。(東)



スタッフとボランティア、多くの人の手と心で大会は運営される。



おずおずと、メンバーさんとの初めての会話

## 自然・環境 ■二宮町葛川クリーンアップ

●実施団体 葛川をきれいにする会

地道な取り組み、葛川はずつと続いている。  
継続は力なりと実感できるのだ。



悲しいが、川には自転車や金庫までが捨てられていたそうだ。

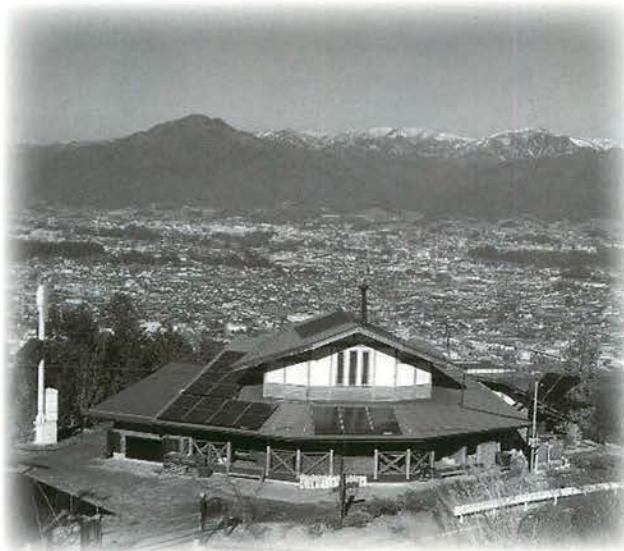
葛川クリーンアップは、地域の中高年の方が地元の川をきれいにしたいという一心で続いている地道な活動である。「社会貢献活動」の中でもかなり地味な方の活動だが、一旦参加すると脱落する実習生の割合は低く、恐らく活動の中核を担っている「葛川をきれいにする会」のメンバーの皆さんのが実習生を引き留めているに違いないと考える。実習生のMとIは、高校時代にラグビーで鍛えた体と精神を持ち、富士山の清掃ボランティアにも会の方々と参加したそうだ。Mは、「清掃をしていて、清掃のやり方を学ぶのではなく、大人社会の大先輩といろいろな話をし、若者の話とは全く違う部分があり、とても楽しかった」、Iは「自然の強さと弱さを知った」と報告し、さらに、Mは「清掃を橋の上から眺めていた子ども達が居たので、この活動を若い世代に引き継いでいきたい」とも述べ、頼もしい限りだ。(東)

### ■自然・環境 ■資源エネルギーの地産地消を学ぶ

●実施団体 (特活)いいだ自然エネルギーネット山法師

エネルギーが足りない未来がやつてくる。  
どうすればいいのか。今から実践しないと。

実習の現場は、長野県飯田市下久堅、天竜川を眼下に望む南信州の限界集落だ。化石燃料を全く使わずに、太陽光・風力・バイオマスといった自然エネルギーだけで寝泊りできるようになつた「風の学舎」があり、そこに6日間、実習生5名がお世話になつた。「6日間で2単位！それにすがろう！」というフザケた発想で臨んだ2年生4人は痛い目に合う。薪を積み上げて保管する簡易倉庫の土台づくりや大豆畠の草取りなどを担つたが、夜はコテコテに疲れてすぐに寝るしかなかつたそうだ。それでも、唯一の3年生Kは、「自然エネルギーの利用が日本では軽視されていると思う」という意見を持つにまで、山法師の活動に理解を示す成長を見せた。大学としては、長野県にまで実習に行かせる是非が問われたが、実にユニークで貴重な体験ができる実習テーマである。「理論+汗+実践できる力」を育む活動に挑戦できる猛者を募集中！(東)



太陽光パネル、風力発電を備えた「風の学舎」。



ゴミを拾い続けた成果は、水質調査で確かに検証されている。



まず、カヌーのパドルの扱いからイメージトレーニング。



実習生は、回を重ねる毎に、声が出るようになり、教え方も上達していく。

精一杯のサポート、  
感謝されるって気持ちいい！

高齢者の初心者を対象にしたパソコン講座で、学生がマンツーマンでサポートする活動である。湘南なぎさ荘とやすらぎ荘と提携した講座では、それぞれ5回（1回2時間）に渡り12名の方が受講された。パソコンの基本、文字入力、インターネット、地図の使い方などであるが、受講される方々はいずれも新しいものに敏感で、意欲の高い方たちばかりである。実習生のAは質問攻めで、最初は答えるのに手一杯であったが、回を重ねることに余裕も出てきて雑談を交えながらコミュニケーションが取れるようになってきた。最終回のアンケートでは、「学生達が丁寧に教えてくれたのが良かった」「湘南工科大学生を見直した」など、いずれもうれしい感想を頂け、学生Aも達成感を得て無事終えることができた。そして次は初心者以外も対象にした新たな講座にチャレンジしたいと意欲を示してくれたのはうれしい限りだ。（本多）

工科系ものづくりユニバーサルカヌー体験会

●実施団体  
(社団法人)かながわデザイン機構

水の動きは柔軟で自在だ。ボクの心も揺られてだんだん固さがとれた。

昨年度「社会貢献活動1」を終えた学生Aが、今年は「社会貢献活動2」に進んで実習を行つた。したがつてAは学生ボランティアで関わった時期も加えると3年以上の経験があり、ペテンニアで達に達していた。特に、障がいのあるお子さんは絶大な人気があり、Aのサポートでカヌーに乗ることを多くのお子さんが希望したそうだ。そんなAも今年は壁にぶつかった。組織の改変に伴い、カヌー体験会に関わるボランティアメンバーが変わったのだ。そのため、若造のAがシニアのボランティアの方々に指示を出さねばならなくなつた。それでも、ギクシャクした時期を乗り越え、Aの学生としての立場ではなく人としての個性が認められ、徐々に年長者の方が歩み寄つたそうだ。このように、様々な個性をもつ者や多世代の方が関わる社会貢献活動は難しい面もある。それでも「人生、勉強だ！」と豪語するAは頼もしい。(東)



艇をていねいに洗う。体験会の下準備と後片づけも大事な活動だ。



シニアを侮ってはいけない。好奇心もやる気も意欲もバッチャリだ。



教職志望の1年生・Iがビスケットワークショップで堂々と進行中。

「社会貢献活動1」の実習を終えた実習生がもう一段階先に進む科目「社会貢献活動2」は、2008年度から履修生の登録が始まり、活動が開始された。その年は、ちょうど筆者が社会貢献活動支援室に着任した年だが、それから6年、最近「社会貢献活動1」の履修生の中に、最初から「社会貢献活動2」にまで進みたいという学生が増えてきており、実習先様のご理解とご協力を得るために、これまでの活動をまとめる必要性を感じたので、ここに報告する。

もともとは、実習テーマ「車椅子ケアネット」(旧称「車椅子の点検整備」)で活動していた実習生が、福祉施設「横浜市桂台地域ケアプラザ」の活動区域である横浜市栄区だけでなく、大学のある「藤沢市でこそ」車椅子の点検整備を行いたいと、

「自分たちで考えて行動する」をモットーに活動を広げて行つたのが始まりである。実習生は、不具合のある車椅子を点検整備させてくれる藤沢市内の福祉施設を、スタッフの助けを得て開拓し、連絡や打ち合わせも自主的に行い、放課後の

### 実習の始まりと位置づけ

「社会貢献活動2」では、障がい者の労働補助具、余暇活動補助具を作つて、「〇〇〇装置」として福祉施設に納品するのだが、その後、現場で利用されるにつれて改良を依頼され、「〇〇〇装置2号機」などを作る必要が生じて、「社会貢献活動2」に進む学生が増えていった。

さらに、実習自体をおもしろく、もつとよくしたい、後輩に伝えていきたいと、活動を引き継ぐために延長されていったのが、実習テーマ「高齢者パソコン講座サポート」であろう。そして、「もつと活動を担いたい」という気持ちは、他の実習テーマでも広がりを見せ、子ども・教育分野の「辻堂こども広場」や「辻堂のヤング☆スクエア」では、

支援室がかなり賑やかになった時期がある程であった。

# 自ら考え行動する市民社会の担い手を育成！

東 宏乃  
社会貢献活動支援室

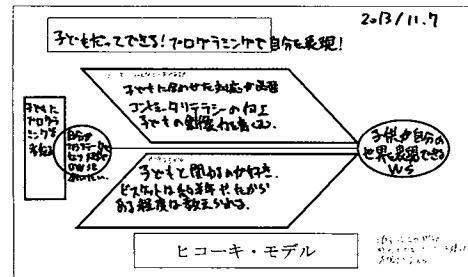
同時に、「社会貢献活動」の中核を担う実習テーマ「福祉ものづくり」では、障がい者の労働補助具、余暇活動補助具を作つて、「〇〇〇装置」として福祉施設に納品するのだが、その後、現場で利用されるにつれて改良を依頼され、「〇〇〇装置2号機」などを作る必要が生じて、「社会貢献活動2」に進む学生が増えていった。

さらに、実習自体をおもしろく、もつとよくしたい、後輩に伝えていきたいと、活動を引き継ぐために延長されていったのが、実習テーマ「高齢者パソコン講座サポート」であろう。そして、「もつと活動を担いたい」という気持ちは、他の実習テーマでも広がりを見せ、子ども・教育分野の「辻堂こども広場」や「辻堂のヤング☆スクエア」では、

「社会貢献活動1」で実習先の実態を学び、対象となる子ども達の特質を知り、その上で、「自分だったら何かできるだろう」と、活動を企画・立案するようにならんとしたのが「社会貢献活動2」となつていった。

「社会貢献活動」の『授業案内』では、「社会貢献活動2」の目的について、「本授業は、『社会貢献活動1』の履修を終えた学生ひとり一人が、それぞれの力をさらに伸ばす主体的な学びを実現するために、新たに50時間の社会貢献活動を継続しながら取り組む活動です。履修生は、自ら活動の目標を設定して、あたかも一つのプロジェクトを企画実行するつもりで実習に臨んでほしいです。(中略)地域社会との関わりの中で試行錯誤し、工学や技術について深く考え、広い意味での市民社会および市民科学の担い手を育成することも目指しています。」と掲げている。つまり、「社会貢献活動2」は「社会貢献活動1」

「社会貢献活動1」以上に重みのある5時間を行なう活動だと言つてよい。



## 実習開始のプロセス

「社会貢献活動2」では、履修登録をする前に、「私のプロジェクト」という登録シートを記入することが義務づけられている。何をどのように、誰と協働しながら、いつごろから開始するのか、「社会貢献活動1」を終えたからこそ見えてくる目標に向かって、実習先の理解も事前に得て、実習生はこのシートを記入する。そして「私のプロジェクト」のシートを社会貢献活動支援室に提出し、テクニカルアドバイザーの了解を得て履修登録をする。

大事なのは、事前研修に相当する時期(前期は5月末、後期は10月末)に、「企画立案ワークショップ」に参加して、企画を立てることである。「企画立案ワークショップ」は、具体的には、「リマスシートで企画立案」や「ヒコーキモデルで企画立案」などのアクティビティを行い、実習生が個人やグループで企画を練つていくことになる。(このワークショップのファシリテーターは筆者が務める)実習生の個人的な思いが先走つても「ヒコーキ」は墜落するばかりだし、また、実習の現場にニーズがなかつたり、実習生にスキルやポテンシャルがなかつたりすれば、「ヒコーキ」はそもそも飛ばない。そんなところを確認するのが「企画立案ワークショップ」となる。参考までに、2013年度後期の「ビスケットワークショップ」の「ヒコーキモデル」(図1)を載せておく。

一方、実習先の皆様にとつて、「社会貢献活動2」は、実習生の一層のコミットを期待して喜んでいただける場合もあるが、実際は負担な場合もある。実際、実習テーマ「茅ヶ崎里山保全」では、実習先の茅ヶ崎里山公園俱乐部の中核メンバーから、本学の実習生に対応するスタッフを増員してくださるなどの措置がとられた。

表1 「社会貢献活動2」による実習の活動例

活動番号	実習テーマ	開始年度	終了年度	活動の具体的な内容
B5004	車椅子ケアネット (旧称)車椅子の点検整備	2008	2012	藤沢市の福祉施設の車椅子の訪問点検整備 小学校や放課後キッズクラブ等での車椅子試乗体験会
B2001	福祉ものづくり	2008	継続中	障がい者の使う労働補助具・余暇活動補助具の製作
A2002	「ふれあいの一歩」イベント支援	2008	2011	交流活動の写真展の企画開催等
B1001	高齢者パソコン講座「湘南なぎさ荘」「やすらぎ荘」	2008	継続中	学生主体の講座の開設および教材の作成
B7004	小学校理科授業の協力	2008	2009	テコの原理を教える授業の企画実施
A1002	辻堂子ども広場	2009	2009	琥珀みがき教室の企画実施
A3008	太陽の家障がい者スポーツ	2009	2009	サウンドテーブルテニスのサポートと実践
A3006	電動車椅子サッカー	2009	2011	審判の資格取得、大学祭での公開練習試合の実施
A4002	茅ヶ崎里山保全	2009	2012	竹炭の浄化作用の検証実験、稲の植え方と収量の関係検証実験等
A4005	引地川の環境保護	2010	2011	鵠沼海岸クリーンアップのボランティアリーダー 指標生物ハグロトンボ調査
B5005	PCリユース「パソコン工房」	2010	2011	小中学校へのカットモデルの寄贈、 放課後キッズクラブでのPC分解教室
A1005	辻堂のヤング☆スクエア	2010	2012	バスボム(発泡入浴剤)作り、ペットボトルで潜水艦作り
A5004	東日本地震災害ボランティア	2011	2012	RQ市民災害救援センターでの後方支援(物資輸送・広報班記録係)
A4003	東京港野鳥公園整備	2011	2012	公園の排水路のパックテストによる水質調査
A3004	車いすテニス大会サポート	2011	2012	大会運営のボランティアリーダー
A1004	放課後キッズクラブ	2012	2012	タグラグビー体験会の企画実施
A4001	二宮町葛川クリーンアップ	2012	2012	「葛川をきれいにする会」のホームページ作成
B2002	ユニバーサルカヌー体験会	2013	2013	体験会の運営ボランティアリーダー
B7006	ビスケットワークショップ	2013	継続中	大学のパソコンルームを活用した近隣の小学生対象のワークショップの企画実施

## 「社会貢献活動2」の具体例

さて、「社会貢献活動2」の実際の活動を具体的に見て行こう。2008年度より2013年度まで、70名の実習生が「社会貢献活動2」に進み、活動した実習テーマは19に上った(表1参照)。

実習テーマ「茅ヶ崎里山保全」の「社会貢献活動2」は、ある実習生Kの疑問が元になって始まった。茅ヶ崎里山公園俱乐部では、竹林から間引いた竹を利用して竹炭を焼き、公園祭りで市民に廉価で販売し、

その時、竹炭の脱臭効果や净水効果を謳っていたが、本当なのだろうか?と、疑問を持ち、調べた方が良いとKは提案したのである。その問い合わせをTなど代々の実習生が引き継ぎ、「社会貢献活動2」の活動として竹炭が水道水中の残留塩素を除去するかどうかの簡易実験を行うことになった。結果として、「水　おいしくなります!」と題した実験結果を示したパネルを展示し、竹炭を公園祭りで販売できた。

また、実習テーマ「茅ヶ崎里山保全」では、竹炭の実験の後は、田んぼに植える稲について、苗を1本植えにする場合と2本植えにする場合と収量が違うのかどうかの検証実験も行った。このように、工学部の学生だからこそできる活動を行い社会貢献を果たした。



高齢者パソコン講座でマンツーマンの丁寧な説明をする実習生。

また、最近の例であるが、実習「ビスケットワークショップ」の場合、高齢者パソコン講座でマンツーマンの丁寧な説明をする実習生。

## 実習生の成長と今後の展望

「社会貢献活動2」に進んだ実習生は、自ら成長する。「企画立案能力」「文書作成能力」「プレゼンテーション能力」はいうに及ばず、何よりも、「自らの言葉で体験を語り発信する実習生」が誕生するのである。それは、体験学習のもつ教育的な可能性による。ある識者は、「社会貢献活動2」は、「自ら活動することで自分も相手も見えてくる」活動だと表現している。つまり、「社会貢献活動1」は実習先様の指導をいただく活動であるが、「社会貢献活動2」は、他ならぬ実習生が主人公になる活動なのだと言えよう。

実習テーマ「高齢者パソコン講座サポート」のJ(コンピュータ応用学科3年)は「自分の中にある、コンピュータについての知識を全部引き出して、できるだけ高齢者の方たちにわかりやすい言葉を選びながら、自分の力を出していきました。自分はコミュニケーション能力も高いと思っていますので、その点においても沢山の方とお話をし、パソコン講座を飽きさせないようにも力を出していきました。」と頼もし報告をしている。

しかし、そのような教育は手間がかかる。受け入れ実習先様の理解、および担当教員・社会貢献活動支援室スタッフの下支えがあつて成り立つ活動なので、受け入れられる「社会貢献活動2」は、年間に6人～10人が限度だとも言える。しかし、実習生の成長が著しく、「社会貢献活動2」は、「実習としての醍醐味」のある活動であり、教育活動として可能性に満ちている。今後も「社会貢献活動2」の実習生を支援して行きたいと、改めて思う次第である。



## 上手に教えるには、適度な距離感と自分でやってみせること

名前のとおり、フリーにふらっと立ち寄れる施設で、勉強をしに来る子どもたちのサポートをしていました。対象は、小学生と中学生が半々ぐらい。不登校などさまざまな事情を抱えている子どももいます。だから、何を教えるかというよりも、彼らと適度な距離感をとることを第一に考えてきました。距離を詰めすぎても相手はひいてしまいますし、少しづつ信頼関係を築いていくことが必要でした。自分がやってみせないと、人はついてこない。この経験は、いざれ自分が社会に出て、後輩や部下の指導に当たるような立場になったときに生かしていくけるのでは、と思っています。



**鈴木誠之さん**

機械工学科3年  
実習テーマ：ふりふら勉強会



## どんな作業も、 楽しくするのは自分次第

思いのほか、子どもたちと接する機会がたくさんあって、楽しく活動をすることができました。里山での活動は、幼稚園児ぐらいの小さな子どもから、上は定年退職後のベテランの方たちまで、幅広い年代の人たちと触れ合うことができます。大学の中では出会えないような方たちの話を聞くとそれまでは気づかなかった、さまざまな視点に気づき、自分自身が何か一つステップアップするような、そんな経験ができたように感じています。どんな作業も、楽しくするのは自分次第。つらいと思えばつらいかも知れませんが、自分の心がけ次第で、そこに楽しさを見出すことは、いくらでもできます。そんなことに気づいたのも、「社会貢献活動」の魅力の一つかな、と思います。



**神宮慶斗さん**

コンピュータ応用学科3年  
実習テーマ：高齢者パソコン講座サポート「湘南なぎさ荘」「やすらぎ荘」

## 対話を楽しみながら、 成長した自分を実感できる

1年生のときのプロジェクト実習でこの活動を知り、「社会貢献活動1、2」と、3年間この活動を続けています。マウスやキーボードも知らない高齢の方たちにどうすればもっとわかりやすくなるのか、一人ひとりに合わせて、教え方を工夫します。そのために必要なのは、相手との対話につきます。僕らの世代は、コミュニケーションが苦手な人が増えていると言われています。「社会貢献活動」はどの活動をとっても人と接することが多いと思います。でもそこが活動の楽しさでもあり、話すことが苦手な人も、知らずしらずのうちに、コミュニケーション能力が上がっていくのを自分で必ず実感できると思います。



**吉田信希さん**

機械工学科2年  
実習テーマ：茅ヶ崎里山保全





全ての工学は人々の幸せのために

# 「社会貢献活動」で学んだこと

2013年度に、実際に「社会貢献活動1、2」に参加した5人の学生たちの声を紹介します。



平原 裕也さん

電気電子工学科2年  
実習テーマ:辻堂のヤング☆スクエア

## 自分でやるのではなく、 周りの人と連携することが大切

教職を目指していて、教育に関心があったので、子どもたちと触れ合える、このテーマを選びました。自分のことを慕って、毎回活動に来る小学生もいて、素直にうれしかったですし、やりがいを感じながら、楽しく活動に取り組むことができました。子どももと一緒に活動するときには、先回りして子どもの自主性を損なわないようにしつつも、大人がしっかりと危険予測をすることが必要です。見落としのないように目配りをするためには、やはり仲間との連携が一番大きかったと思います。夢が叶って教職に就けたら、この経験を生かして、仲間や地域の人たちと協力し合いながらやっていきたいと思っています。



## 大学の中だけでは、 経験できない気づきがある

利用する人の目線に立ったものづくりを学びたくて、「社会貢献活動」に参加しました。私はスイッチ1つで家電などのオン・オフができる万能スイッチというのを作りました。作ったものを初めて使ってもらったときに、会話することもままならない利用者さんが、「あああ」と声をあげてくれて、「ありがとう」と言われているみたいで、苦労したかいがあったと、本当にうれしかったです。私はこの活動で初めて、重度障がいを持つ人と触れ合う経験を持ちました。できることなら、彼らの困難さを軽減するために何か貢献したいと思い、この活動をきっかけに、医療系の大学院への進学を決めました。普段の大学生活だけでは気づかなかった、自分の中の可能性を「社会貢献活動」が教えてくれました。



間瀬 真桜さん

コンピュータデザイン学科4年  
実習テーマ:福祉ものづくり

# 学生たちのまだ見せていない一面に、光を当てるきっかけに

**木枝暢夫**

湘南工科大学工学部長・教務部長・工学部人間環境学科教授



木枝暢夫(きくち・のぶお)  
工学博士。専門分野は、材料の新規合成プロセスで、ナノレベルの微細構造制御によって性能を高めた環境浄化触媒や蓄電デバイス用材料の開発を行っている。

## 学生たちの興味・関心の多様化に 「社会貢献活動」の目的も変化

サービスラーニングの本来の意義は、大学で学んだことが実際に社会の中で役に立つのを実感するということです。「社会貢献活動」の中の福祉ものづくりを例に挙げれば、授業で学んだ機械などの知識を生かして、身体が不自由な方が使いやすいよう器具などをチューニングしていく。大きな企業では、そのように一人ひとりに合わせるということは難しいですから、そこに学生たちが行くことで非常に喜ばれます。学生はユーザーの生きたニーズを知るとともに、やりがいを感じることができます。

けれども近年は、そういうコンセプトが少し難しくなつてきているところがあるようです。というのも、かつては工学一筋という学生が多かったのですが、最近の学生たちは

興味・関心の幅が多様になって、狭い分野では取りきれない傾向があるからです。

そのため、工学の知識のみならず、もっと広い意味での社会人として活躍できる能力＝ジェネリック・スキルを身につけるということに、「社会貢献活動」の目的も変化していくものだと考えています。

大学全体の考え方としても、社会で通用する力をつけていくために、グループワークなどをしていく方針です。その中で、「社会貢献活動」もその一つの有効な仕掛けにばかりならず、相互作用としての有用性が上がって、履修する学生がえていくことを期待しています。

その考え方でいえば、部活動なども非常にいい経験です。直接学びにつながることはないかもしれませんけれども、間接的には絶対に効果があるはずです。いろいろな人間が集まると、意見の対立など面倒なことがいろいろと起こつてくるでしょう。大事なのは、そこでけんかをしたから辞めてしまうのではなく、そこをうまく調整してどう乗り越えていくか、というのを経験していくことです。

学生時代は、とにかくいろんなことをやってみること

目的は変化しても、学生たちには、とにかく



全ての工学は人々の幸せのために



## 尻込みせずに、まずは一步を踏み出してほしい

私が最近の学生を見ていて感じるのは、見るシーンによって、まったく違った姿を見せることです。普段は頼りないような学生でも、あるところでは「こいつ、こんなにできたらだ！」というところを見せたりする。そういうムラがある学生が、増えているようを感じます。ですから学生たちを前にすると、もつと違った面を持っているのではないかという期待を持ちつつも、そういう面を出し切れていないで損をしている学生もいるのではないか、と懸念を抱いてしまうのです。

「今の若者は意欲がない」と言う人もいますが、ボランティア活動などへの意識は、我々の若い頃と比べたらずつと高い世代です。ですから、一度火がつけば、どんどん燃える素地というものは持っているのだと思います。

尻込みせずに、まずは一步を踏み出して、それぞれがキラリと輝く一面を見つけて出してほしい。その一步に、「社会貢献活動」はぴったりのステージだと思います。

今は、大学の中での学生同士のコミュニケーションもとても薄くなっています。大学の中にはいるだけでは成長するのはなかなか難しい時代と言わざるを得ないでしょう。そんな中で「社会貢献活動」という実習の場は、社会への一步を経験できる貴重な機会であることは疑いようがありません。

# 実習テーマおよび実習受入先(2013年度)

活動分野	テーマ名	団体名(実施団体)
一般教育	辻堂子ども広場	辻堂子ども広場
	りか遊び・さんすう教室(旧称) ふりふら勉強会(新称)	(公益財団法人)よこはまユース 横浜市青少年交流センター(愛称:ふりーふらっと野毛山)
	放課後キッズクラブ	(公益財団法人)よこはまユース 放課後キッズクラブ(19カ所)
	辻堂のヤング☆スクエア	(公益財団法人)藤沢市みらい創造財団 辻堂青少年会館
一般福祉	障がい者施設「まどか」サポート	(社会福祉法人)創 ライフケアセンター「まどか」
	「ふれあいの一歩」イベント支援	藤沢市肢体不自由児者父母の会
	障がい者の外出サポート(買い物・調理)	(特活)あいむ湘南
	障がい者サポートセンター「径(みち)」	(社会福祉法人)訪問の家 サポートセンター「径」
	障がい者入所施設「湘南あおぞら」サポート	(社会福祉法人)藤沢育成会 知的障がい者入所更生施設「湘南あおぞら」
	放課後デイサービスサポート	(社会福祉法人)光友会 太陽の家
	訪問の家「朋」活動サポート	(社会福祉法人)訪問の家 生活介護事業「朋」 または 「朋」第2(CAN)
	大学訪問受入プログラム	湘南工科大学
	ぜんぎょう日中一時支援事業サポート	(社会福祉法人)光友会「日中一時支援事業所ぜんぎょう」
一般ユニバーサル スポーツ	車いすテニス大会サポート	神奈川県車いすテニス協会
	電動車椅子サッカー	電動車椅子サッカーチーム Yokohama Crackers
	太陽の家障がい者スポーツ	(社会福祉法人)光友会 太陽の家「体育館」
一般自然・環境	二宮町葛川クリーンアップ	葛川をきれいにする会
	茅ヶ崎里山保全	茅ヶ崎里山公園倶楽部
	引地川の環境保護	川と海の環境を守る会
	辻堂海浜公園管理	(公益財団法人)神奈川県公園協会 辻堂海浜公園管理事務所
	ソフトエネルギープロジェクト	(特活)ソフトエネルギープロジェクト
	都市の森の保全活動	(公益財団法人)日本野鳥の会 横浜自然観察の森
	資源・エネルギーの地産地消を学ぶ	(特活)いいだ自然エネルギーネット山法師
一般社会	NPO支援センター事業サポート	(特活)藤沢市市民活動推進連絡会 藤沢市市民活動推進センター
	被災地寄贈PC再生活動	(特活)藤沢市市民活動推進連絡会 藤沢市市民活動推進センター ITサポートチーム
工科系情報	高齢者パソコン講座サポート 「湘南なぎさ荘」「やすらぎ荘」	(社会福祉法人)藤沢市社会福祉協議会 藤沢市老人福祉センター「湘南なぎさ荘」、および「やすらぎ荘」
工科系ものづくり	福祉ものづくり	湘南工科大学
	ユニバーサルカヌー体験会	(社団法人)かながわデザイン機構
工科系社会	〈社会〉とある映像プロジェクト	(特活)湘南市民メディアネットワーク
工科系教育	おもしろ科学たんけん工房学習支援 はまぎん こども宇宙科学館サポート	(特活)おもしろ科学たんけん工房 SFG・NTTファシリティーズ共同事業体(代表企業(株)コングレ)
	ビスケットワークショップ	(特活)デジタルポケット

※(特活)は(特定非営利活動法人)の略である



全ての工学は人々の幸せのために



# これまでの外部評価委員会の議論をふりかえつて

市山雅美  
総合文化教育センター・一見尚之

情報工学科

## 1. 外部評価委員会とは

外部評価委員会は、授業改善のためのPDC Aサイクルの一環として、専門家による独自の

評価が必要とされることから、また、サービスラーニング型科目では、地域社会との連携が重要であるとの観点から、始まった。2006年度よりこれまで継続的に行われている。

外部評価委員会は、年2回、報告会の日(各学期の授業終了日の翌日)に行う。当日の流れは、中間期研修会、報告会、実習先懇談会、外部評価委員会となつておらず、外部評価委員会は、中間期研修会を視察し、報告会、実習先懇談会に参加してから、外部評価委員会に臨む。

外部評価委員は2名で、教育関係者、市民活動関係者から1名ずつ選定している。評価委員の任期はとくに定めていないが、継続的に活動を評価していただきたいため、ある程度継続して委員をお願いしている。

外部評価委員会は、外部評価委員と社会貢献活動連絡協議会の教員と支援室スタッフで行っている。時間は17時ごろから開始し1時間程度である。外部評価委員には、事前に検討

すべきテーマについて伝えてあるが、議論の流れで自由に発言する。毎回、議事録を作成している。本報告も、その議事録の記録に基づいている。

## 2. 外部評価委員会の果たしてきた役割—報告会の運営を例に—

これまで、外部評価委員の意見によって、社会貢献活動の改善が進められてきた。また、それが外部評価委員会の使命でもある。その中で、報告会の運営・指導について取り上げる。

まず、報告会で学生が準備するパワーポイントの報告(以下、P.P.T.)について見てみたい。

2009年度前期には、報告会の実習生の報告について、「あつたことをあつたままに報告していて、淡淡としていた」報告もあった、「形でしかないプレゼンもあった。いいたいところだけ言うようにしない」といった指摘



が、外部評価委員よりなされた。以下のようなり取りがあり、報告会のPPT作成の指導じだつたら一緒だったのも気になった方法が検討された。

委員●報告会のテンプレートが、実習先が同じだつたら一緒だったのも気になった支援室スタッフ●前任者からひきついで、報告書は、報告書にそつたテンプレートでPPTを作るようについていた。

委員●本人のインパクトがあつたことを表現するためには、テンプレートはなくともいいのではないかと思う。

委員●このままだと形だけで流れてしまう。

支援室スタッフ●支援室の担当者が違つても学生に対して同じ対応になるようにと考え、PPTを作成するにあたつてのマニュアルを支援室で作成していたが、そのように指導していった影響かもしれない。

以上のような議論を受け、2010年度後期には、PPTのサンプルを学生に渡すのをやめたが、「結局どのスタッフが応対しても同じ対応になるように書面を作つて渡してしまつた」というように、指導については模索が続いていた。外部評価委員からは、「こういう活動がなければ、出会うことのなかつた人と出会いで、いろいろなものを得ている。ただ、報告会ではそのゆたかさが十分に伝わつてこない」との指摘を受けた。

しかし、その後、2011年度前期には、「雛形にポンポンというものではなく、よくできていた」、「学生のオリジナリティーが出ていた」などの感想があり、中には「自分がまとめた言葉に『具体的に言うと』などの補足的につかれていた」との評価もあった。

み碎いて発表してた」との評価を受ける報告もあつた。2011年度後期には、「学生が自分で、質問があればそれに対応したとのことであつたが、外部評価委員からは、「支援室のテコ入れがあつたと思う」との発言があり、支援室スタッフによる丁寧な指導の効果がうかがえる。

発表のしかたや態度については、外部評価委員から、「やはり表現力だと思う……PPTを作るか作らないかという問題ではなく、自分が何を伝えたいか、発表に向けた発表の仕方とかを彼らにきつちり植え付けること」と、その指導の重要性の指摘を受けている。

また、会場についても、2013年度後期には、会場を小さ目の教室にして、「発表者と聞く人の距離が近かつた」、「素直な質問がなされていて」、「自分の言葉で発表していた」との評価を得た。会場を小さい部屋にした背景には、2009年度後期に、「この報告会は何のためにものなのか。プレゼンは聞いてくれる人がいて『そうか！』と応えてくれるからうれしい」という意見があつたように、話す一聞くという関係を密接なものにしたいという意図があつたと思われる。

外部評価委員には、厳しい目で報告の内容を見ていただき、形式にとらわれがちな報告会の指導について、批判を投げかけていただいた。

グループによる発表についても、外部評価委員の提案で始まった。従来は、2学科ずつ、3部屋に分かれ発表を行い、各学科の教員が



報告を聞き、「社会貢献活動」の成績評価の一つの材料としていた。そのため、同じ実習テーマでも、学科が異なれば、別の部屋で報告を行つたりしていた。

そのため、2009年度前期には、「同じ活動をした学生たちがチームで発表することはできないでしょうか。受け入れ団体も、ばらばらだとどうやって質問すればいいのかわからぬ。だからチームワークで発表できたら濃い内容になるし、質問する方も質問しやすい」（報告会には、実習先の方もお招きして、報告を聞いていただいている）との指摘を受けた。

教員は学科の枠組みや成績評価にとらわれがちな面もあるが、外部評価委員の指摘により、新たな気づきを得た。「実習先からみると、『湘南工科大学から2人受け入れている』というスタンス。○○学科から一人、○○学科から一人というふうには考えていない」という指摘に、大学と実習先での見方の違いが表われている。

このようにして、2010年度前期には、同じテーマの実習生でグループ発表を行うようになつた。しかし、形式を変えただけではうまくいかず、「共同発表」というよりは、個別発表を3つ足したような感じ」の報告もあつたという指摘がなされた。しかしながら、現在は、前述のとおり実習生の報告については改善がなされている。

同時に、報告の評価についても、各部屋担当の教員が、評価票に評価を記入し、各学科の教員に渡し、それに基づいて評価を行うようになり、学科ごとに部屋を分けずにすむようになされている。

善している。

しかしながら、報告会についても未解決の課題がある。報告会の意義について、2009年度後期には、「学生にとつても報告はなんのためなのか」というと評価ばかりになつてしまつて、その色が強くなっているのではないか」、「プレゼンは誰のためにするのか、ということですが、知らない学生たちに伝える、というコンセプト」がよいのではとの意見が出された。それに対し、教員の側から、「報告会は、第一に学生のため。第二は成績評価のため」と答え、支援室スタッフは、「学びを深める機会として報告会を位置づけるのであれば……」と発言している。

このように実習生の学びのためと評価のためという二つの役割が報告会に求められている。

### 3. 課題

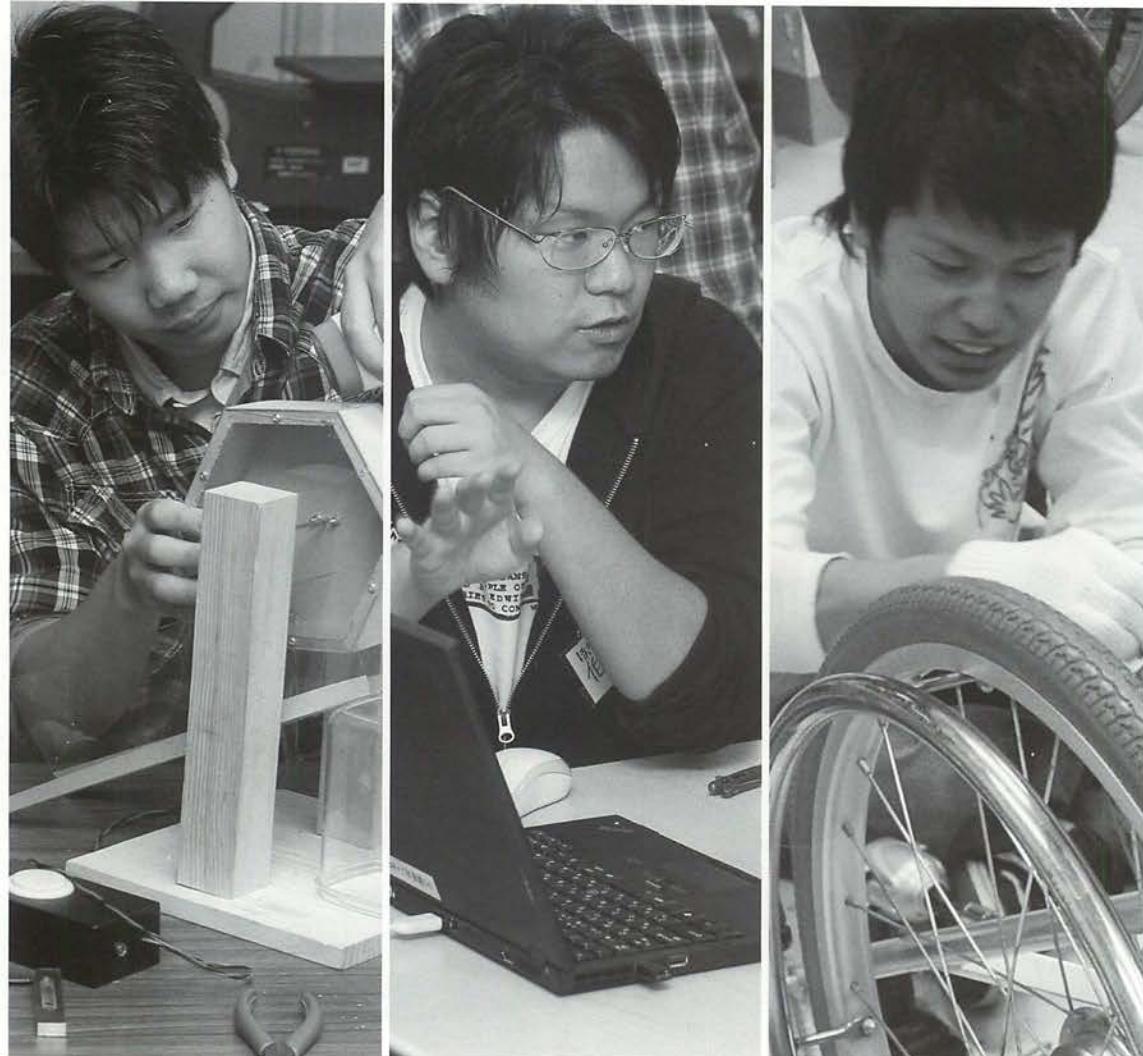
外部評価委員会はこのように、重要な提起を行い、外部の視点によって、社会貢献活動連絡協議会の委員は新たな気付きを得て、それをもとに科目「社会貢献活動」は改革を進めている。

ただ、外部評価委員会は、年二回で時間も限られているため、そこで得られる知見はどうしても制約がある。外部評価委員会だけに活動の評価を頼るのではなく、もっと日常的な場面で「内部評価委員会」のようなものがあつてもよいのではないかと思う。そこで議論が、外部評価委員会へとつながり、より議論を豊かにできるのではないかと考えられる。

# 鳥の目で「ふりかえる」実習体験

東 宏乃

社会貢献活動支援室



## はじめに：鳥の目・虫の目

ものの見方には、いろいろあるが、「鳥の目」「虫の目」という見方がある。空から眺めるように巨視的に対象を見る視点が「鳥の目」で、地面にはいつもぱつて対象について詳細に記述しようとする視点が「虫の目」である。ものごとを見るには両方の視点が必要で、その往復運動が新たな発見に役立つというものである。

これまで、中間期研修ワークショップについて、「年次報告書」で毎年報告してきたが、それはすべて「虫の目」によるものだった。今年は趣向を変え、2008年度から社会貢献活動支援室（p.36参照）のテクニカルアドバイザーとして学生に接してきた立場から、「鳥の目」で実習生の学びについて書いてみたい。

## 2. 「かけがえのない実習体験」

人生の面白さは〈旅〉にある。〈旅〉に相当するのが、大学教育で言えば、実習などの体験学習ではないだろうか？ 迷つたり、意外なことに出会ったり、自分の知らない面を見せつけられたり……。人生の先輩との意外な出会いがあつたり、また反対に、自分を写す鏡のようにウロチョロする子どもに出会つたり……、と。

そうこうしているうちに、自分というパーソナ



全ての工学は人々の幸せのために

リティの奥行きが自ずと深まっていき、自己肯定感が高まる、つまり自信がつくと、言つて良いのではないだろうか。

特に本学の学生のように、中学や高校時代、学校教育の中で教員から認められたり自信を持つたりすることが出来にくかった若者にとっては、「社会貢献活動」で得られる体験は、もう一つのオルタナティブな価値軸で自分や社会について知る格好の機会のようだ。

卒業の挨拶に来る実習生と話をしていると、「社会貢献活動」は、アルバイトともサークル活動とも違つて、純粹に掛け値なしの人間と出会う可能性に満ち満ちているところに価値があると言える、と筆者は密かに感じてきた。

例えば、「茅ヶ崎里山保全」の実習を行つた実習生のAは言つた。「僕があきらめなかつたのは、東先生が見えていてくれたことと、実習先の人が我慢強く、僕の、竹炭による土壌改良と大根の生育の関係についての収量調査の結果を待つててくれたことです。」「これまでの自分だったら投げ出していたかもしれません、実習先の人を裏切ることになると思うと、野外実験を途中で放り投げることができなかつたのです。」「茅ヶ崎里山の実習をやりとげて本当に良かったと思つています。就職活動も辛かつたんですけど、里山での実験が上手くいかなかつた時の気持ちをバネに、あきらめずに、良い結果となりました。本当にありがとうございました。」といつた具合である。

また、1年生の時から実習に参加したBは、表面的にはチャラチャラしていた学生だったが、同学年の真面目派Cの助けもあって、「社会貢献活動2」に進み、実習内容の企画立案を自分達で行い、実習先に提案をし、一日工作教室を主催した。具体

的には、辻堂青少年会館に来る子ども達を対象に、「辻堂のヤング☆スクエア」の企画で、バスボム（発泡入浴剤）作りを実施した。

子どもにとつてどんな活動が魅力的なのか、素案の段階では30種類もの企画をリストアップしたという。その中で、子ども達が喜びそうな企画、準備がある程度大変でない企画、材料費が数千円で済む企画を絞り込んでいったそうだ。

一旦バスボム作りと決めてからも、実際に、バスボムとして入浴剤が固まるのかどうか、入れすぎると型崩れする重曹とクエン酸をどのくらい入れたら良いのか？ 型抜きの形を星型は難しいのでドーム型（半球型）にした、などの試行錯誤を行い、前実験もしたのである。いいかげんに楽をして単位を取りたいと実習を始めた1年生の頃とは、比べものにならない程の成長ぶりである。

彼らを変えたのは、ズバリ、子ども達である。Bは実習の「報告書」の「自ら設定した目標はどちら達成できたか？」の問いに、「子ども達との円滑なコミュニケーションを図ることと、それを支える先生方や親御さんから信頼される指導員を目指しました。」と書き、さらに自由記述欄には、「僕達が学んでいることを教えられることが、どれだけすごいことで、それを教える機会があり、聞いている子ども達がいる。僕は辻堂青少年会館に感謝します。ありがとうございます」と書きました。教育のつらさ・楽しさ・意義多くの体験がかけがえのない思い出です。」と、教える立場になつてこそ理解することができた教育の意義・教育の楽しさだけでなく、つらさをも発見し、かけがえのない体験だと結んでいます。

人は、かけがえのなさに出会うとき強くなれるのだ。上手く行かないことを受け止めたり、どうしてこんなことをやらないではないのかという

思いに詰まされた時、それに意義を見出したりと。そんな好例が、BとCの実習だったのではないだろうか。Cは、「無償で、何かまたは誰かに奉仕する喜び。笑顔や『ありがとう』と言う言葉が、何よりも大切だと学びました。」と実習の最後に書く報告書でふりかえっている。

一方、Bは、支援室には時々、遊びに来ていたが、その時に、「オレ、マジで面白いさがりやなんですが、けど、バスボム頑張りましたよね。当日、東先生が（参観）来ててくれたのが残念つすよ。」と。

私は、「活動の記録写真でちゃんと様子はわかつているよ。頑張ったね。」と応えた。そうすると、「そうすよね、オレ、子ども達にタコつて呼び捨てにされているんですけど、うれしいです。」と素直に語つた。そんなBは、就職活動の面接で、「社会貢献活動」のことばかりを話題にしやべつたのだとう。「いやあ、面接官が『ヤング☆スクエア』の活動を熱心に聞いてくれて、面接時間があつていう間に過ぎて、ポンポンポンボーンと上手く行くことができたんですよ。」と。就職先は、住宅メーカーの営業だと言うが、実習に携わった大学の3年間で、本当にりっぱに成長したなど、思う次第である。実習生のBやCを受け入れてくださった、実習先の皆様方、そして何より子ども達に、深く感謝したい。

### 3.なぜ研修をワークショップで行うのか？

さて、前書きが長くなつたが、実習のふりかえりである。体験は「ふりかえら」ないと、ただ流れいくものだ。体験した感動や疑問をそのままにしておくのはもつたない。「社会貢献活動1」では、50

時間の実習の中間期(15時間以上40時間未満の時期)に、中間期研修を行っている。実習の前半を「ふりかえり」、実習の後半の目標を得るための研修ではある。しかし、権威ある専門家の話を聞く研修ではなく、実習生同士が学び合うように、あえて、ワークショップ形式で研修を行っている。参加者は実習生、彼らが「主役」である。ワークショップのファシリテーター(進行役)は支援室の筆者という、普段実習のコーディネーションで学生に接している者が務め、場のしつらえとして仰々しさをなくし、日常感を出す努力をしている。また、本学は、作文やコミュニケーションに苦手意識をもつ学生の多い工学部生ばかりなので、ワークショップでは、学生が気持ちのハードルを下げて参加し、対話ができるような仕掛けをいくつか作ってある。

#### A) 言葉の発言より身体で意思表示する

(具体的には、「一步前へ」というアイスブレイクから始める)

B) 自分の体験をかけがえのないものとして伝え合う体験をもつ(具体的には、2人ペアになつて、質問シートをもとに実習体験を共有する「相互インタビュー」という時間をつくる。向き合う者同士は、グループサイズの最小人数である2人なので、圧迫感は減り、反対に、良い意味での義務感が生じる。)

C) 自分の体験を、親身になつて誰かに理解してもうことで、自分の実習を外側から客観的に眺めることができます。(インタビューをした相手の体験を、まるで自分の体験かのように一人称で語る「自己紹介」を導入し、相手に成りきつて、他ならぬ一番近くなつた実習生の実習体験を紹介することで、他人の実習について疑似体験をすることができる。)

D) インタビューの内容についての発表は少人数

クショップ形式で研修を行っている。参加者は実習生、彼らが「主役」である。ワークショップのファシリテーター(進行役)は支援室の筆者という、普段実習のコーディネーションで学生に接している者が務め、場のしつらえとして仰々しさをなくし、日常感を出す努力をしている。また、本学は、作文やコミュニケーションに苦手意識をもつ学生の多い工学部生ばかりなので、ワークショップでは、学生が気持ちのハードルを下げて参加し、対話ができるような仕掛けをいくつか作ってある。

#### A) 言葉の発言より身体で意思表示する

(具体的には、「一步前へ」というアイスブレイクから始める)

B) 自分の体験をかけがえのないものとして伝え合う体験をもつ(具体的には、2人ペアになつて、質問シートをもとに実習体験を共有する「相互インタビュー」という時間をつくる。向き合う者同士は、グループサイズの最小人数である2人なので、圧迫感は減り、反対に、良い意味での義務感が生じる。)

C) 自分の体験を、親身になつて誰かに理解してもうことで、自分の実習を外側から客観的に眺めることができます。(インタビューをした相手の体験を、まるで自分の体験かのように一人称で語る「自己紹介」を導入し、相手に成りきつて、他ならぬ一番近くなつた実習生の実習体験を紹介することで、他人の実習について疑似体験をすることができる。)

D) インタビューの内容についての発表は少人数

で共有する。(最後に、相互インタビューで得た内容を元に、一重の輪になつて「他己紹介」をするが、16人は多いので、その場合は2つの輪に分け、1つの輪を8人程度とする。8人であれば、全員の「他己紹介」を聞くのに集中力が保てる時間(約20分~25分程度)となる。)

E) 体験し自らが実感したことなどを、言語化する。

ワークショップでは、他己紹介の後、最後のアクティビティとして「一言ふりかえり」を行っているが、その体験がリアルなうちに、ふりかえりを言葉にしてもらう。つまり、「ふりかえりシート」には、ワークショップの後に書く決まりになつてある中間期レポートと同じ問い合わせ、それについて、ワークショップの最後のその場で書いてもらうようになっているのだ。そうすると、作文が苦手な故に理系に進学したという本学の多くの学生にとって、ワークショップの最後のその場で書いてもらうよりも、体験の言語化がスマーズに行くようだ。

実際、ワークショップをしないで、実習のレポートを書かせようとしたら、きっと一行か二行しか書けない本学の学生でも、ワークショップの後であれば、七行でも八行でも自分の言葉で本当に集中して書く姿が見られたのである。

#### (c) 最初は緊張しましたが、話してみると話しやすく、かなりリラックスして話すことができたと思います。今回のワークショップでうやむやだった目標をはつきりととらえることができたので、参加してよかったです。(引地川の環境保護・人間環境学科3年)

(d) すごく興味深くて楽しく有意義な時間だった。今まで気になつていた他の実習先の活動内容を実際に活動している人達から詳細にかつわかりやすく聞くことができたので、とても強い満足感が得られた。様々な情報を知れて、自分達の活動と比較することができたので、心身ともにリラックスすることができた。(高齢者パソコン講座サポート・コンピュータ応用学科2年)

さて、おエライ先生の言葉を得るのではなく、自分達の実習体験を相互インタビューで交換しあった参加者は、どのような感想をもつたのか、「ふりかえりシート」から特徴的な感想を再録しておきたい。

(a) もつと積極的に人と関わっていこうと思った。

(b) 今日はまさかこんなことをやると思っていなかった、みんなの話ややつていることを聴けて

自分からできる仕事をもつと探して実習先の方々の役に立てるような人になりたいと思います。その上でレポートなどをまとめて単位がとれるようにしたいです。だた、単位をとるだけという意識ではなく、貢献できて初めてもらえる単位だと他の人の話を聞いて思いました。(茅ヶ崎里山保全情報工学科2年)

(b) 今日のワークショップをしてみて思ったのは、自分のやつている実習だけじゃなく、いろいろな実習先で、決断力や注意力が必要になつていていることを感じた。自分自身の目標も決断力と注意力だったので、実習の後半のテーマにしていただきたいと思います。自分が決めた目標だけではなく、インタビューで聞いた違う目標も持てたらいいと思いました。(放課後キッズクラブ・人間環境学科3年)

(c) 最初は緊張しましたが、話してみると話しやすく、かなりリラックスして話すことができたと思います。今回のワークショップでうやむやだった目標をはつきりととらえることができたので、参加してよかったです。(引地川の環境保護・人間環境学科3年)

## 4. ワークショップでの気づき

——2013年11月28日の中間期研修

ワークショップを事例として

(e) 今日はまさかこんなことをやると思っていなかった、みんなの話ややつていることを聴けて



全ての工学は人々の幸せのために

なかなか勉強になりました。自分以外の実習先でどんなことをやつていて、どれだけ忙しいのかを知りたい気持ちもあつたので、すぐ参考になつたので、よかったです。(茅ヶ崎里山保全機械工学科2年)

(f)色々な人の体験が聞けてよかったです。他の「社会貢献活動」でやっていることも大変なことをやつているが、その中でもすごく楽しいことがあるということがわかつたので、ぜひ、後半もがんばつてもらいたいです。自分もがんばつていきます。(高齢者パソコン講座サポート)コンピュータ応用学科2年)

さて、これらの感想を聞いて、皆さんはどうな印象をもつのであろうか?

ワークショップによる魔法で、ワークショップが終わつた直後に高揚体験が湧きあがつてくるのは良くあることだか、それを差し引いても、参加者の言葉には、自分の実習を何より「自分事」として引き受けている実感が出ていると考えられる。

つまり、実習はやらされているわけでもなく、自らが選び取つた活動なのであり、その貴重さが一人ひとりの実習体験を彼らが自分自身の血肉にしているのだと、推察できよう。

## 5. 実習生の学び ——サービスラーニングで自己を知る

「社会貢献活動」の学びを、一口で語ることは難しい。実習テーマの多様性があり、さらにその実習を行つて実習生の幅のある個性が掛け合わされて、どのような教育効果があるのかを分析するのは非常に困難なためである。しかし、わかつてのこと

とを彼らは吸収し、自分の可能性を広げてることを確実だということだ。

これまでの筆者の経験によれば、「社会貢献活動」を履修する学生は、大きく3つに分けられる。

一つ目は、「大学生になつたのだから社会貢献活動をしたい!」という「意欲派」だ。高校生の時に、オープンキャンパスで「社会貢献活動」という科目があることを知り、それ故にこの大学を選んで入学したという学生が少數ながら確かに居る。また、教職課程を取り将来教員になりたいという学生にとっては、教育・子ども系の実習での経験は、教員になる布石として、確かな手ごたえがあるようだ。

昨年度卒業した機械工学科のDは、「大学の中だけでは学べないことが山ほどある。」と言つて、「社会貢献活動1, 2」を履修し、教員として社会に出て行く上で必要なことを体験したという。教員としてだけでなく、一人の人間として生きて行くために学べる場があるとも、表現していた。そして実際、Dは、公立中学校の技術科の教員になつた。

また、情報工学科の学生で、将来はコンピュータ関連のクリエイターになつて子どもを対象としたゲームのコンテンツを作りたいが、そもそも自分は子どもの気持ちや興味関心を知らないので、それを知るために実習テーマ「ビスケットワークショップ」を選択したというEが居て、彼は、子どもの目線で思考する重要性を学んだという。

二つ目は、工学以外の可能性を模索し、「社会貢献活動」の実習に可能性を見出そうとする「模索派」である。例えば、大学進学の時に保育士になろう「福祉ものづくり」や、障がい者も対象にした「ユニアーバーサルスポーツ」を選択し、また、実習先に福祉施設を選ぶ学生が少なからず居る。

「社会貢献活動」は、共通教養科目でありインター・シップではないのだが、学生は自分なりに良く考えているな、と感心する。ある女子学生Gは、「実習は社会人の方々とお話できるチャンスであり、仕事をするという堅苦しいインターネットではまた違つた意味で、『社会貢献活動』は、気軽に社会に接することのできる機会です。」と、捉えて実習に取り組んでいた。

三つ目は、「単位が足りないから」履修するという「駆け込み派」である。最初の目的はそうでも、実習を通して、学生は良い意味で「化ける」。先に述べた、BやCは、「駆け込み派」だったのだが、「社会貢献活動2」にまで実習を進め、見事に目的意識をもつた自主活動をするまでになつた。学生の潜在的 possibility は実に大きい、と思つた次第である。

このように、「社会貢献活動」の実習は、学生と社会とをつなぐ中間点に位置する学びを提供してくれれるサービスラーニングそのものだということが解かつていただけたと思う。

実習先の方々のご協力があつてこそ成り立つ科目であることに感謝しつつ、この稿を閉じたい。

☆スクエアで、子どもとの体験活動に従事したという学生Fがいる。彼は「これまでの自分は、漠然と子どもに関する職に就きたいと思っていましたが、今回の活動でそれだけでは仕事にならないと感じました。」と報告し、現実を目の当たりにして、自分の職業の選択の参考にしたようだ。

# 必要なのは、物事に対する好奇心と探究心

茅ヶ崎里山公園俱楽部では、市民参加のもとでの里山保全を行い、人と自然が共生する里山を、次世代にいくための活動を続けています。そのような茅ヶ崎里山公園俱楽部のお二人に、多くの実習生を受け入れてくださったこれまでの経験を元に、コメントをいただきました。

関根 潔さん

茅ヶ崎里山公園俱楽部副会長

田之倉 稔さん

茅ヶ崎里山公園俱楽部生態調査班リーダー

技は教えてもらうものではなく  
自ら見て、真似て、盗んでいくもの

何かを望むとすれば、  
物事に対する好奇心や探究心

番の根幹のように思っています。

学生時代のこの経験が、  
物事に対する深い視点の基盤になる

たとえば「今日の作業は、どうしていつもと

違ったやり方なのか」とか、疑問を持つと、見ることも違ってきます。そして、そこが理解できてくると、今度は何をやつたらいいのか、というのが自ずと見えてくるようになるはずです。

慣れている我々は、次に何をやつたらいいのか、といったことはお互いにわかりあっていますから、勝手に体も動いてしまうんです。

もちろん質問してもらえば、いくらでもアドバイスはするつもりです。でもそれ以上に、そういう技は、見て、真似していくほうが、はるかに理解しやすいもなんです。社会の中ではそういうことはたくさんあります。

うまくいっている人には何かコツがあるはずです。それを見て、盗んで、自分のものにしていく。それは里山だけでなく、社会の中でも同じことなんです。それを生かしてもらうことができれば、日々の生活や勉学がもっとおもしろくなりますよ。

湘南工科大学から実習生を受け入れるようになって8年目になります。我々も最初のころは少し遠慮があつて、お客様のように彼らを扱っているところがありました。でもこの数年はすっかり仲間だと思って、ほかの会員と区別なく、活動に参加してもらっています。

それはやはり、お互いに信頼関係ができてきましたのでしょ。以前に比べて、参加する学生たちもただ単位さえとれればいいというのではなく、何らかの目的を持つて参加するようになります。問題意識も高くなつたように思います。だから、作業にも積極的にかかわるようになりますし、责任感も出てきたのだと思います。

我々は、何も難しいことを望んでいるわけではありません。せっかく里山に来るのだから、ただ作業をするだけでなく、周りの自然に目を向けて、ここでしか見られないものに、もっと目を向けてほしいんです。

そのため在我が学生たちに何かを求めるところは、物事に対する好奇心や探究心が、一



田之倉さん

関根さん

られるようになれば、これから先、物事を考えるときに、より深い視点でのごとを見られるような基盤がでてくるに違いありません。

# 外部評価委員会報告

2013年度後期の報告会のあとに、実施された、外部評価委員会で議論された内容を、一部ご紹介します。

## （参加者）

◆外部評価委員

堀千鶴（日本大学芸術学部准教授、教育学）  
水谷光（本学教員（順不同））

湘南台市民活動「プラザ室長」

一見尚之、大木真琴、市山雅美、牧紀子、野中薫子、東宏乃

## テーマ1

学生の「発表する力」に対する、必要な支援とは？

●今日の発表を聞かせてもらったところでは、これまでよりもだいぶ「発表する力」はついてきているような印象を受けた。今回は小さめの部屋で、マイクも使わずに、発表者と聴衆との距離が近いのもよかつたのかもしれない。

か、と思わざるを得なかつた。  
けれども、今日の発表は、学生たちの伝えようという努力が感じられて、「発表する力」がたいぶついてきたように思う。担当教員たちや支援室の関わりが良くなつたのではないだろうか。

か、と思わざるを得なかつた。  
けれども、今日の発表は、学生たちの伝えようという努力が感じられて、「発表する力」がたいぶついてきたように思う。担当教員たちや支援室の関わりが良くなつたのではないだろうか。

## テーマ2

「社会貢献活動」における、学生と教員の関係はどうあるべきか？

学んだことや感想を、自分の言葉で言っている学生が多くた。一方で、抽象的な言葉になってしまっているところも見受けられた。質問をすると、具体的な言葉で言えていたので、もう一段踏み込んで、具体的な言葉で言えるようになると、よりよい発表になるのではないか。

●数年前に初めて報告会を聞いたときは、内容が稚拙で、受け入れる実習先の社会貢献なのか、と皮肉に思つた記憶がある。受け入れ側としても、単位を取ろうという学生を受け入れるわけだから、相当の覚悟を持つて受け入れているはず。それに対し、当時の発表は内容が浅く、あまりにも失礼なのではない

えられないだろうか。

◆「社会貢献活動」においては、支援室が担任に近い立場にあると思う。教員側は、各学科から一人ずつ委員が出ているが、担当の実習先と学科の学生が必ずしも一致するわけではないので、他学科の学生になると、接点をもつのは難しい。窓口としてはやはり一旦、支援室で受けてもらつて、そこから各学科の教員やCCC（コミュニケーションサークル）の担当教員に振り分けてもらうのが、今の状況においてはふさわしいのではないか。

た、報告書を学生に書かせるときにも、到達点といつたものを定めにくい。

◆たしかに、何を問い合わせるかというのがワークショップでは大事で、外堀を埋めるような問い合わせができるけれども、実習中の学生にズバリ食い込んで「問い合わせ立てられない。

●受け入れる側からすると、学生が参加してくれることによって、その団体が活性化されたり、自分たちの目標や目的をもう一度見直す機会になつて、そのグループが継続的に社会貢献できる団体に育っていくと

いう面もある。実際の活動を見ても、そういう関わりはすでにされているのではない。ならば、教育目標として、そのねらいを組み込んでいいのではないだろうか。

◆通常の授業でも、目標を設定して、学生がどこまで到達できているかと、それを評価する

◆「社会貢献活動」の目標と評価をどうとらえるべきか？

◆全般的に、各授業の目標とどういう力が養われるかというのを、明確にしていく。こう

◆「社会貢献活動」における評価をどうとらえるのかを考えたい。

◆「社会貢献活動」の目標と評価をどうとらえるのかを考えたい。

## 社会貢献活動支援室とは

- 先生と連携して、解決を図っています。
- 専門のアドバイザーが相談にのってくれます。
- 各種の情報が活動資料として用意してあります。

# まずはアクションをおこしてみる 知らない世界に身を置いて考える 創造的工学はそこから始まる

社会貢献活動支援室は、実習科目「社会貢献活動」に関する連絡と相談の窓口です。週4日程度開室し、開室時にはテクニカルアドバイザーが常駐します。

授業に関する履修の届出や手続きの相談、実習「社会貢献活動」の実習先とのコーディネーションを行っています。

学生が使えるパソコンや打ち合わせのできるスペースがあります。

一般学生、実習生の来室・利用は、いつでも歓迎します。一度お立ち寄りください。



## 社会貢献活動 連絡協議会の 教員



**水谷 光** 総合デザイン学科  
社会貢献活動は、皆さんの中から新しい可能性を見つけることができる授業科目です。新しい人や社会との出会いによって、より広い視点を持つた、ひとまわり大きな人になれるでしょう。

### 牧 紀子

コンピュータ応用学科

社会貢献活動は、様々な人との出会い、皆さんいろいろな可能性が開ける場所です。自分でも気づいていなかつた新しい一面・能力を発見できるかもしれません。是非、チャレンジをしてみてください！

### 石村 光敏

機械工学科

社会貢献活動の「福祉ものづくり」を一緒にやりませんか？それをすることで、さらに勉強したいという気持ちにつながると思います。とにかくやりませんか？

**大木眞琴** 電気電子工学科  
専門技術を通して社会に貢献することが、我々工学を学ぶ者の基本的なスタンスですが、逆に「社会貢献活動」に参加し「何を学ぶべきか」が見えてくるかもしれません。とにかく参加しましょう。



全ての工学は人々の幸せのために

私たち講師陣に  
なんでも  
相談してください  
みなさんの  
チャレンジを  
応援します  
自分の長所、短所は  
意外と自分自身では  
気づかないもの



### テクニカルアドバイザー

#### 東 宏乃

「恋せよ！旅せよ！人と世界に関わろう！」は私が尊敬する恩師の言葉です。この実習を体験した学生の100%がやつて良かったと言います。就活に役立つだけでなく、何よりも人生を豊かにします。

#### 飛田 和子

大学内ではなかなか知り合えない方々と関わる機会があります。また、新しい知識や考え方など自分に気づく機会になります。ぜひ、実際の活動の中で体験してみてください。

#### 石黒君子

地域社会でのいろいろな体験特に、横のつながりだけでなく、絆（子どもから老人）のつながりを体験することができます。社会人となるときには参考になるので、そんな社会貢献活動にぜひ参加してみて下さい。



### 市山 雅美

総合文化教育センター

「社会貢献活動」は自らの経験から学ぶ授業です。活動を通じ経験を積み重ねるのは大切ですが、それだけでは終わらず、そこから何かを学び取っていきましょう。

### 野中 詔子

人間環境学科

興味を持って一步踏み出してみましょう。実習を通して、他者とのかかわりや自分を磨くこと、自分を活かすことを考えてください。责任感を持つて取り組むことも忘れないでください。

